九頭神遺跡発掘調査報告書

１９８８年３月

九頭神遺跡発掘調査団
善通寺市教育委員会

刊行にあたって

この報告書は、善通寺市教育委員会内に事務局を置く九頭神遺跡発掘調査団が、善通寺市都市計画課の委託を受けて、昭和62年10月 1日から翌年 1月14日まで実施した都市計画道路大通線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

善通寺市内ではこれまでにも「王墓山古墳」「仲村廃寺」「彼ノ宗遺跡」「仙遊遺跡」など発掘調査が数多く実施され、貴重な文化財が多数発見されております。これらの報告書を通して埋蔵文化財に対するご理解を深めて頂くとともに、今後の学術文化の向上に少しでも役立てば幸甚と思います。

これまで、発掘調査に御協力頂きました地元の皆様をはじめ、関係各位に対して心から感謝申し上げ、今後とも一層の御支援と御協力を切にお願い申し上げる次第です。

昭和63年 3月31日

九頭神遺跡発掘調査団長
善通寺市教育長　次田　保

例　　言

1. 本書は都市計画道路大通線改良工事に伴い実施された、九頭神遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は善通寺市中村町字高正地･字宮東から下吉田町字本村東において、昭和62年10月1日から昭和63年1月14日まで行い、昭和63年3月31日まで市立郷土館において整理作業を実施した。

3. 調査は善通寺市長平尾勘市から委託された九頭神遺跡発掘調査団が実施した。調査団の組織は下記のとおりである。

団　　長	善通寺市教育委員会教育長	次田　　保
副団長	善通寺市文化財保護協会副会長	杉峰　俊男
調査員	善通寺市教育委員会　文化振興室	笹川　龍一
調査補助	四国学院大学	
指　　導	香川県教育委員会　文化行政課	
事務局	善通寺市教育委員会　文化振興室	

4. 本書の執筆は調査担当者である笹川龍一が行い、遺物の実測については四国学院大学学生の協力を得た。

5. 遺構については、ST(竪穴住居)・SK(土坑)・SP(柱穴)・SD(溝)・SX(墓)で表示した。

6. 本調査で出土した小児の歯は岡山大学歯学部教授小田嶋梧郎先生に鑑定して頂いた。記して謝意を表したい。

目　　次

刊行にあたって・例 言・目 次

第一章　遺跡周辺の地理と歴史 …… 1

第二章　調査に至る過程 …… 6

第三章　調査の概要 …… 8

1. 各調査区の遺構と遺物　①第１調査区 …… 8
②第２調査区 …… 14
③第３調査区 …… 18
④第４調査区 …… 24
⑤第５調査区 …… 30
⑥第６調査区 …… 38

2. SX-04から出土した小児の歯の鑑定結果…… 44

3. 壺棺出土の小児の歯についての一考察・その他の遺物 …… 45

第四章　ま と め …… 48

図　　版 …… 49

遺物観察表 …… 69

挿 図 目 次

第 1図 調査地周辺遠景…… 1
第 2図 調査地と周辺の主要遺跡…… 3
第 3図 伝九頭神遺跡出土土器…… 6
第 4図 調査地及びトレンチ位置図… 6
第 5図 第３トレンチ検出状況…… 7
第 6図 第４トレンチ検出状況…… 7
第 7図 第１調査区出土遺物実測図… 9
第 8図 第１調査区平面図…… 10
第 9図 第１調査区土層図…… 11
第10図 ＳＸ－０１実測図…… 12
第11図 SX-01蓋石残存状況・土層実測図 …… 13
第12図 SX-01基底部実測図 …… 13
第13図 第２調査区出土遺物実測図… 15
第14図 第２調査区平面図…… 16
第15図 第２調査区土層図…… 17
第16図 第３調査区出土遺物実測図… 19
第17図 第３調査区平面図…… 20
第18図 第３調査区土層図…… 21
第19図 ＳＸ－０２実測図…… 22
第20図 SX-02出土壺棺実測図 …… 23
第21図 第４調査区出土遺物実測図… 25
第22図 第４調査区平面図…… 26
第23図 第４調査区土層図 …… 27
第24図 ＳＸ－０３実測図…… 28

第25図 SX-03出土遺物実測図 …… 29
第26図 SK-06・07出土遺物実測図 …… 29
第27図 第５調査区出土遺物実測図… 31
第28図 第５調査区平面図…… 32
第29図 第５調査区土層図…… 33
第30図 ＳＫ－１０実測図…… 34
第31図 SK-11・12出土遺物実測図 …… 35
第32図 ＳＫ－１０出土遺物実測図… 36
第33図 ＳＫ－１０出土遺物実測図… 37
第34図 第６調査区出土遺物実測図… 39
第35図 第6調査区平面・土層実測図… 40
第36図 ＳＸ－０４実測図…… 42
第37図 SX-04出土壺棺実測図 …… 43
第38図 SX-04出土小児の歯実測図 … 44
第39図 SX-04出土小児の歯片と骨片 44
第40図 鉄器・線刻土器・円筒埴輪片実測図…… 46
第41図 第9・10トレンチ土層実測図… 47

図版目次

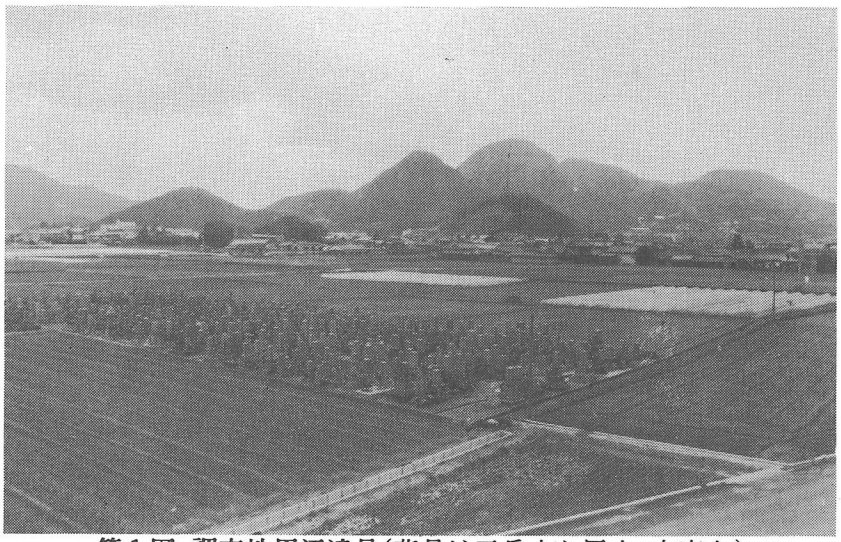
第42図 調査前全景…… 50
第43図 表土除去作業風景…… 50
第44図 発掘調査風景…… 50
第45図 第１調査区全景…… 51
第46図 第２調査区全景…… 51
第47図 第３調査区全景…… 51
第48図 ＳＸ－０１検出状況…… 52
第49図 ＳＸ－０１完掘状況…… 52
第50図 ＳＸ－０１基底部検出状況… 52
第51図 ＳＸ－０１石材除去後の状況 53
第52図 ＳＸ－０１枕状遺構検出状況 53
第53図 ＳＴ－０１遺物出土状況…… 53
第54図 ＳＴ－０２遺物出土状況…… 54
第55図 ＳＴ－０３銅鏃出土状況…… 54
第56図 ＳＴ－０３遺物出土状況…… 54
第57図 ＳＴ－０５遺物出土状況…… 55
第58図 ＳＸ－０２検出状況…… 55
第59図 ＳＸ－０３検出状況…… 55
第60図 第４調査区全景…… 56
第61図 第５調査区全景…… 56
第62図 第６調査区全景…… 56
第63図 ＳＴ－０６遺物出土状況…… 57
第64図 ＳＴ－０６遺物出土状況…… 57
第65図 ＳＴ－０９遺物出土状況…… 57
第66図 ＳＫ－１０検出状況…… 58
第67図 ＳＫ－１１検出状況…… 58
第68図 ＳＸ－０４検出状況…… 58
第69図 ＴＲ－０９設定状況…… 59
第70図 ＴＲ－０９東壁土層…… 59
第71図 ＴＲ－１０設定状況…… 59
第72・73図 線刻土器 …… 60
第74図 円筒埴輪片…… 60
第75図 鉄 器 …… 61
第76図 鉄器のレントゲン写真…… 61
第77図 石 器 …… 61
第78図 縄文土器…… 62
第79図 桃の炭化種子と銅鏃…… 62
第80図 近世陶磁器…… 62
第81図 第１～３調査区出土遺物…… 63
第82図 第３～４調査区出土遺物…… 64
第83図 第４～５調査区出土遺物…… 65
第84図 第５調査区・SK-10出土遺物… 66
第85図 第６調査区出土遺物…… 67
第86図 第６調査区・SX-04出土遺物… 68

第一章　遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70～80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山。西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ケ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことがうかがえる。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。



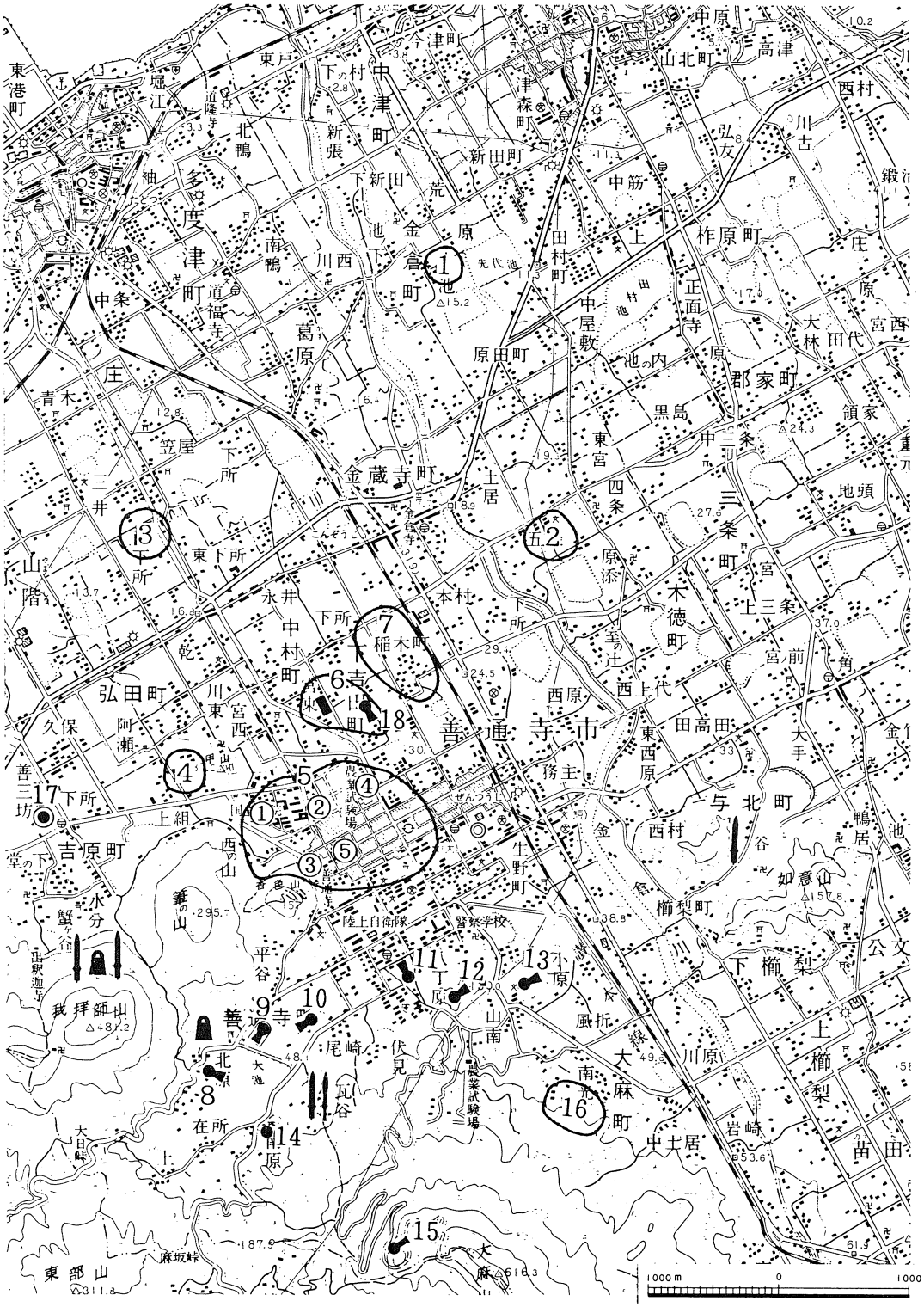
第１図 調査地周辺遠景(背景は五岳山と甲山･大麻山)

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、機内第１様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2～3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mコンターあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化はこの頃まで遡ることができるようである。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稲木石川遺跡が続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られていた。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡の調査から始まる。ここでは弥生時

1．中ノ池遺跡
2．五条遺跡
3．三井遺跡
4．甲山北遺跡
5．旧練兵場遺跡群
　① 彼ノ宗遺跡
　② 仙遊遺跡
　③ 善通寺西遺跡
　④ 仲村廃寺(伝導寺跡)
　⑤ 善通寺伽藍
6．九頭神遺跡
■ 九頭神遺跡調査区
7．稲木石川遺跡
8．北原古墳
9．菊塚古墳
10．王墓山古墳
11．丸山古墳
12．鶴ガ峰４号墳
13．磨臼山古墳
14．宮ガ尾古墳
15．野田院古墳
16．岡古墳群
17．青龍古墳
18．下吉田八幡神社古墳



第２図 調査地と周辺の主要遺跡（1:50,000）

代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行なわれたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺(伝導寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下からは弥生時代後期の竪穴住居が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡２棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳などが発見され、特に弥生時代終末期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測するうえで注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺３基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

また、善通時市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣３口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣２口・細形銅剣５口・中細形銅鉾１口の計８口、我拝師山遺跡では計３カ所から平形銅剣５口・銅鐸１口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸１口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群を本拠とした集団との関連も注目されている。

古墳時代に入ってもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400基を超える古墳が存在し、中でも筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず積石塚としては、大麻山経塚、大麻山椀貸塚、丸山１号・２号墳、野田院古墳、御忌林古墳、大窪ケルンなどが知られているが、中でも野田院古墳は大麻山北西麓(標高405m)のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方部盛り土後円部積石墳である。有岡地区には、同一系譜上の首長墓群と考えられる６基の前方後円墳が確認されており、北東から南西にかけて磨臼山古墳・鶴ガ峰４号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚・北原古墳の順にならんでいる。古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には宮ガ尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された横穴式石室が計８基確認されているなど、様々な点で興味は尽きない。

この頃の西讃岐地域には佐伯氏が豪族として勢力をもっており、白鳳期には佐伯の氏寺である仲村廃寺(伝導寺跡)が、やはり旧練兵場遺跡内に建立されている。そして、この寺が善通寺に姿を変え、古代文化の中枢であったこの地は門前町として繁栄を続け現在に至っている。

参考文献

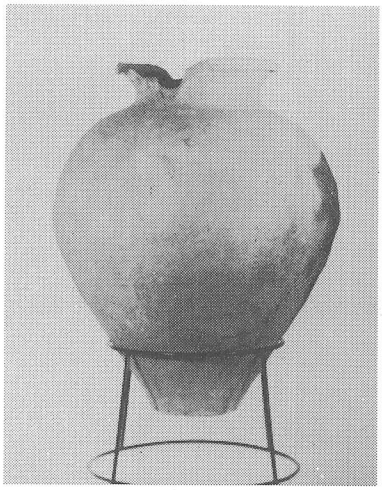
『善通寺市の古代文化』	善通寺市	1973年11月
『善通寺市史』	善通寺市	1977年 7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982年 3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年 3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年 3月
『五条遺跡発掘調査告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査告』	善通寺市教育委員会	1984年 3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年 3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年 3月

『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告』	昭和58年度	香川県教育委員会	1984年 3月
『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告』	昭和59年度	香川県教育委員会	1985年 3月
『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告』	昭和60年度	香川県教育委員会	1986年 3月
『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告』	昭和61年度	香川県教育委員会	1987年 3月
『県道西白方善通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』	昭和61年度	香川県教育委員会 善通寺市	1987年 3月
『四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告』第一冊 中村・乾・上一坊遺跡	昭和61年度	香川県教育委員会 日本道路公団	1987年 3月

第二章　調査に至る過程

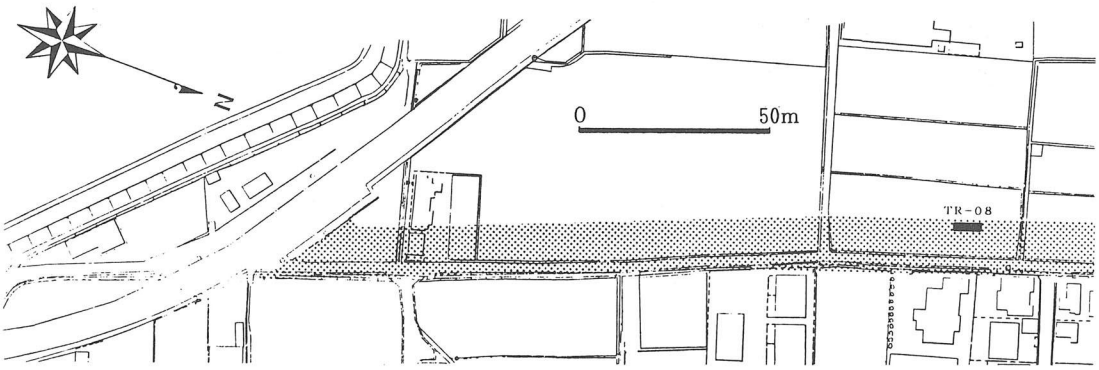
現在の善通寺市周辺にはN-30°-Wの主軸方位をもつ方角地割が非常に良く残っていることが知られている。これは奈良時代に施行された「那珂郡」「多度郡」の条里の痕跡を示すものではないかと考えられているが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う発掘調査などによって、現在の畦の下にそれと同じ方位を持つ古い溝が多数確認されている。

現在"大通り線"と呼ばれている道が「多度郡」の条里でいう二条と三条の境にある。これはN-30°-Wの主軸方位を持つ、両側に側溝を伴い直線的に延びる古い形態を有する幅2m程の道であり、近世後半頃からはこんぴら街道として賑わっていたようで、沿道には多数の道標が立ち並んでいる。また、この道が通過する中村町南部と下吉田町九頭神にかけての地区は、周辺部から比較するとやや微高地状になっている。ここは旧練兵場遺跡群から北に約500m程の場所であり、これまでにも用水路工事や耕作中に多量の土器・石器が発見されており古くから九頭神遺跡の呼称で知られている。そしてこの道から東に300mの場所には社殿裏に前方後円墳の一部が残存する下吉田八幡神があり、本殿床下には竪穴式石室の天井石と推定される巨大な柱状の安山岩が数本保存されている。他にも、この周辺の水田中には多数の円墳が存在していたらしいが、大正時代の電車道建設に伴う土取りによって殆どのものが消滅してしまっている。



第３図 伝九頭神遺跡出土土器

こうしたことから、この地区に弥生時代から古墳時代にかけての集落の存在が予測されていた。

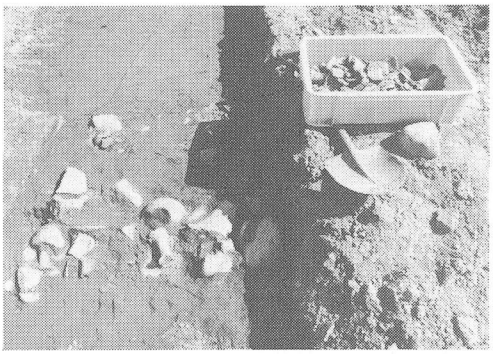


第４図 調査地及びトレンチ位置図

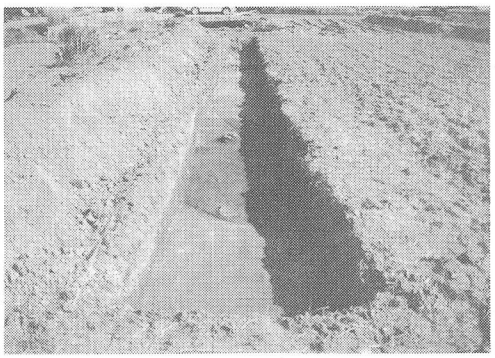
昭和62年度、この弥生土器包蔵地において大通り線が改良され幅16mに拡幅されることになった。施工延長は691m程であるが、九頭神遺跡ではこれまでに調査が実施されたことが無く、遺跡の性格やその正確な範囲が知られていない。しかも工事対象地域内では地形に起伏が認められ旧河道の存在が考えられたため事前に試掘調査を実施し、本調査の範囲を限定することとした。試掘調査は昭和62年4月15日と5月7日・8日に実施し、合計8箇所にトレンチを設定した。その概要は下図のとおりで、北から順に第1～第8トレンチとした。

第1トレンチから北側の住宅跡地では礫層が露出していたため、調査の必要無しと判断した。第1トレンチでは北端が礫層であるが、南端では竪穴住居跡が検出でき、また第2・3・4トレンチにおいても、溝・土坑などの遺構群をはじめ多数の遺物を確認することができたため、検出面をビニールシートで覆い直ちに埋め戻した。

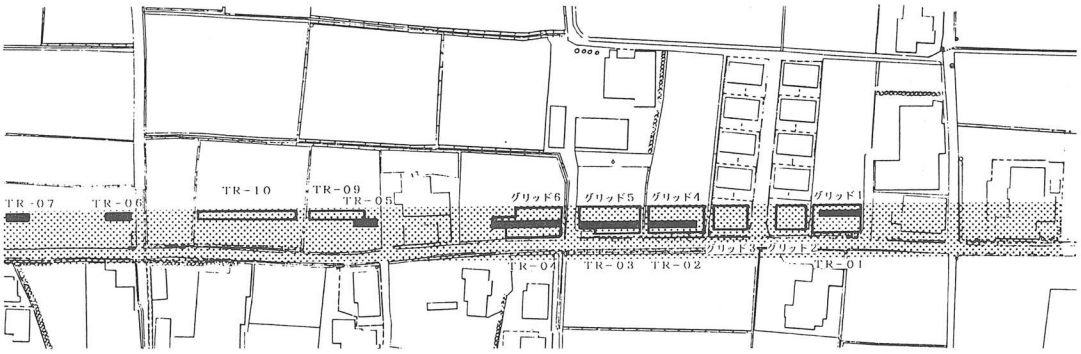
第5トレンチでは比較的安定した地山が検出できたが、遺構・遺物等の検出には至らなかった。第6・7・8レンチでは砂礫層しか確認できず、事前に河道跡と推定された範囲でもあったことから、第6トレンチ以南の発掘調査の必要は無しと判断した。そこで、遺構が確認できた範囲に北から第1～第6調査区と更にその南に第9・10トレンチを設定し、昭和62年10月１日から翌年１月14日にかけて発掘調査を実施することとした。



第５図 第３トレンチ検出状況(北から)



第６図 第４トレンチ検出状況(北から)



（ ▒ 工事予定範囲・■ 試掘調査時のトレンチ・□ 調査区 ）

第三章　調査の概要

1．各調査区の遺構と遺物　この地区では遺構面が極めて浅く、耕作土直下に遺存していることが事前の試掘調査で把握できていたが、遺構面から下10～15cmはマンガン結核を多量に含み濃茶褐色に変色してしまっており、この変色部分を取り除かないと遺構を確認することができないことも判明していた。ただし、変色しているだけで遺構は破壊されておらず、遺物も多量に含まれているため、変色部分を取り除く際に、遺存状態の良い遺物や土器が集中している範囲については、下部で遺構の状況が把握できるまでは出土状況のままで動かさないように注意し、まず重機で表土(耕作土)を除去した後、人力で遺構面上部の変色部分を序々に掘り下げてその検出に努めた。

また、遺構面が全体的に浅く既に削平されてしまっており、耕作土を除去した時点で現われる単一の遺構面上には弥生時代から中・近世にかけての遺構が複合しているため、埋土と出土遺物の関係の観察を注意深く行った。

今回の調査は道路の建設に伴うものであり調査区が狭長な設定となったため、試掘調査で何らかの遺構が確認できた水田、宅地跡それぞれに併せて、北から順に第１～第６調査区を設定し、第１調査区から発掘を開始した。以下、確認された遺構と出土した遺物を調査区ごとに解説する。

① 第１調査区： ここでは箱式石棺墓1基(SX-01)と竪穴住居跡1棟(ST-01)を中心に、土坑や柱穴などが検出されたが、調査区内では北東部一帯に10cm前後の河原石を多く含む砂礫層が露出いる。更にこの北側では水田面が20～30cm下がることなどから、この礫帯が自然堤防を形成している部分であり集落の北端であることが推定された。

SX-01：第１調査区の西壁沿いで石組みの構造物が一部確認されたため、この部分を拡張し調査したところ奇異な形態を呈する箱式石棺が姿を現した。通常この地区でみられる箱式石棺は、板状に節理する性質を持つ讃岐岩質安山岩だけを用いたものであるが、SX-01は大型の讃岐岩質安山岩３枚を使用している他は、全て20～30cm程の河原石(砂岩)で構成されている。その首軸方位はほぼ磁北を指し、墓坑は上場で縦2.3m・横1.0m、石棺の内側で縦1.6m・横0.3m・深さ0.3mを計る。

蓋石は一部分がかろうじて残存していたが、耕作機械の刃の跡が多数刻み付けられていることや遺構が極めて浅いことなどから、他の蓋石については耕作の際に取り除かれてしまったと推定される。またこの水田の地権者によると、「調査した位置から西側でも耕作中に良く大きな石に当たる」ということで、複数の石棺の存在が考えられる。集落の北端に形成された墓域の可能性もある。

遺物については副葬品等は全く確認されず、掘り方や墓坑内から弥生時代後期末頃の土

器片がわずかに出土しただけである。ただ、被葬者の頭部が置かれていたと推定される粘土床部分にドーナツ形の窪みが認められ、枕を意図したものではないかと考えられる。

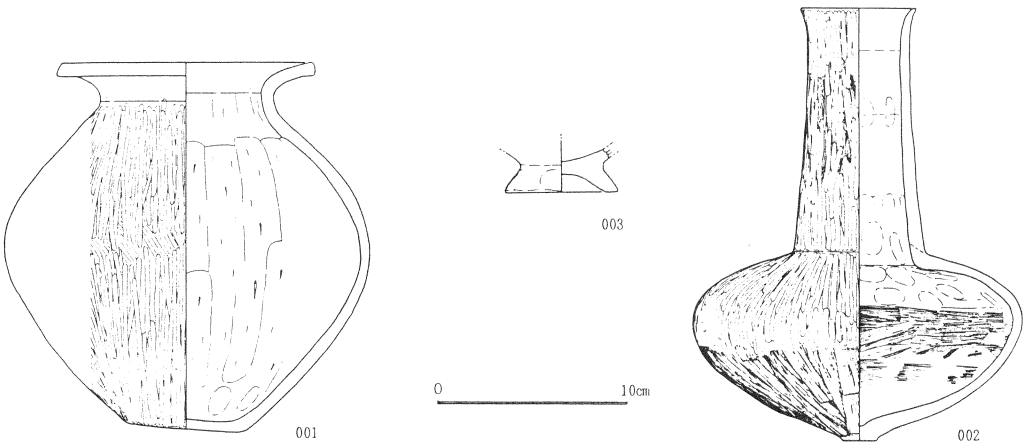
SX-01が構築された時期は出土した土器片や他の類例、遺跡全体の状況を検討した結果、弥生時代後期末頃と推定される。

昭和61年4月1日から翌年2月26日にかけて、善通寺市北東部で県道西白方善通寺線改良工事に伴う発掘調査が実施された。この調査によって九頭神遺跡発掘調査区から北東に700mの位置で小児を埋葬したと考えられる小竪穴式石室が発見されたが、これにSX-01との類似点が認められるので併せて紹介する。大きさは内側で東西に30cm・南北に80cmの小型の埋葬施設で、主軸方位はほぼ東西、頭部側にのみ安山岩の板石を立て、その他は20～30cmの河原石を積み上げて構築したもので、弥生時代終末期の所産と考えられている。この遺構が発見された場所は、第一章で紹介した稲木石川遺跡の北端部にあたり、他に方形周溝墓が一基確認されている。

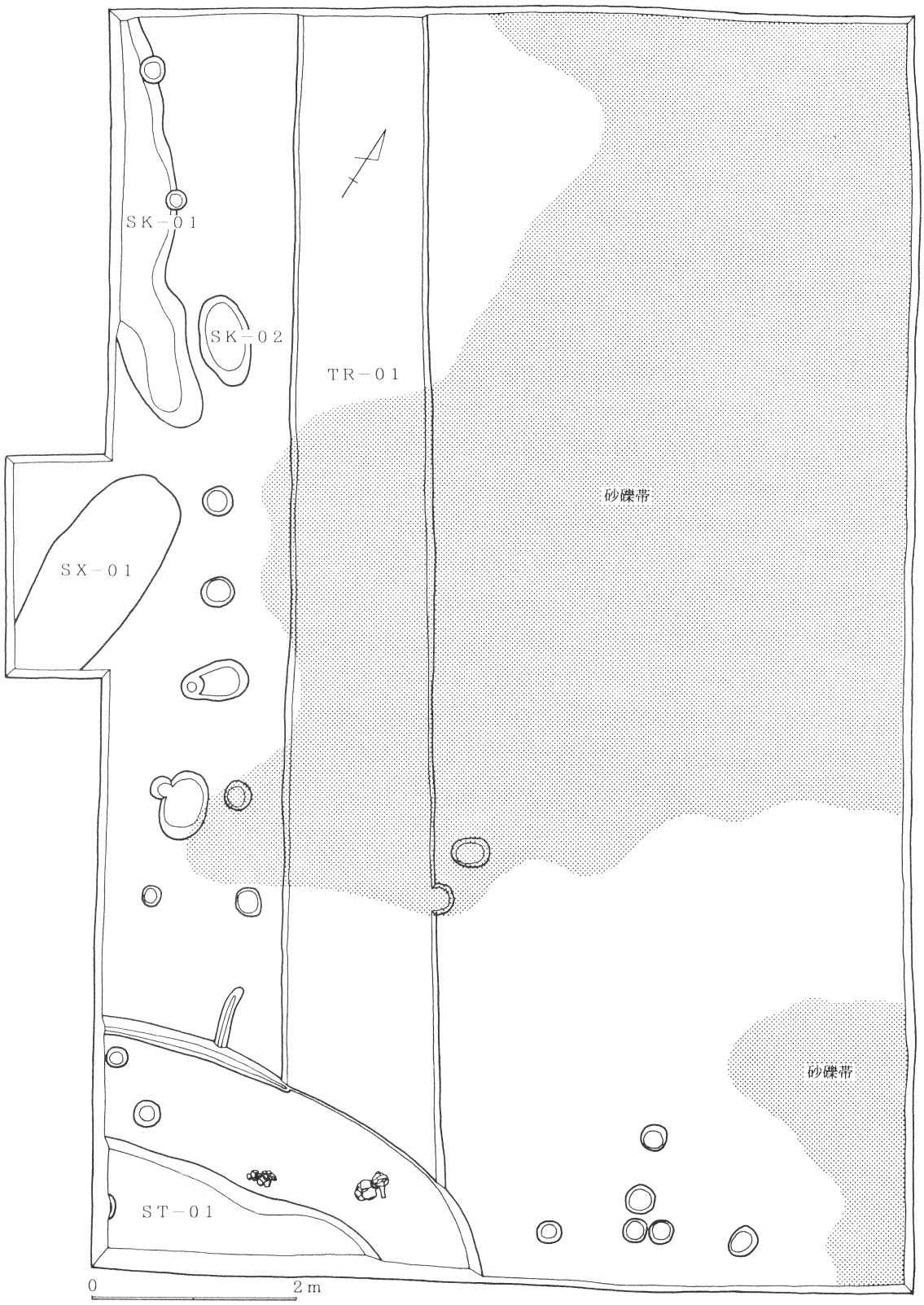
ST-01：第1調査区の南西隅から第2調査区の北西隅にかけて検出された直径8m程の不整円形を呈する縦穴住居で、北側で幅1m・高さ10cm程のベッド状遺構と、南北両側でU字形の断面を呈する壁溝が部分的に検出されている。

遺物は、住居北側のベッド状遺構直上で長頸壺と甕がほぼ完全な形で、住居南側(第2調査区)の床面直上からは外反する口縁内面に縦2条のヘラ記号がある壺の頸部が出土している。出土した土器から、ST-01は弥生時代後期後半頃に機能し廃絶したと考えられる。

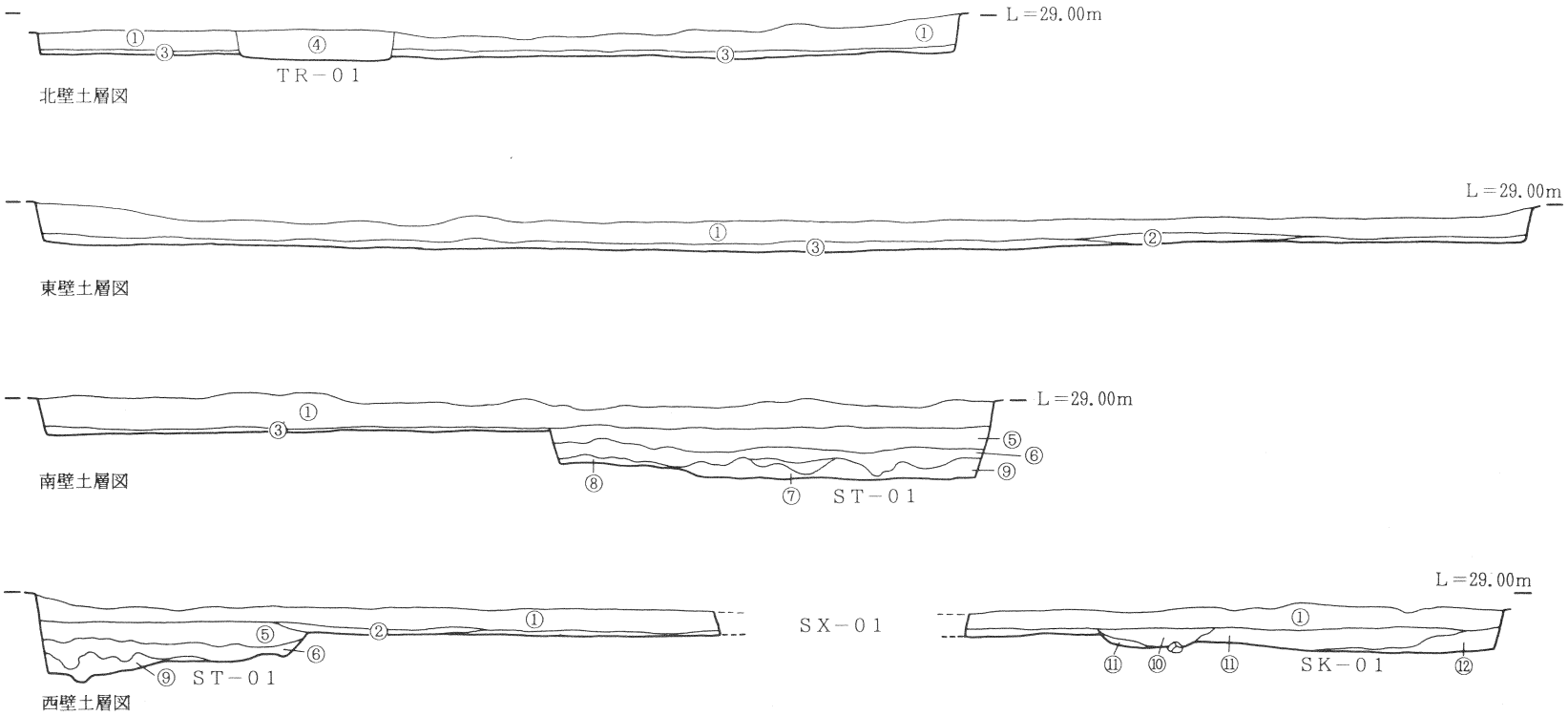
その他の遺構：SX-01からST-01にかけて直線的に延びる柱穴群からは弥生土器片がわずかに出土しただけで、構成された時代等は明確にできない。また、ST-01の西側に集中する柱穴群はその埋土から中近世、SK-01・02は弥生時代後期末の所産と考えられる。



第7図 第1調査区出土遺物実測図 (001～003…ST-01出土)



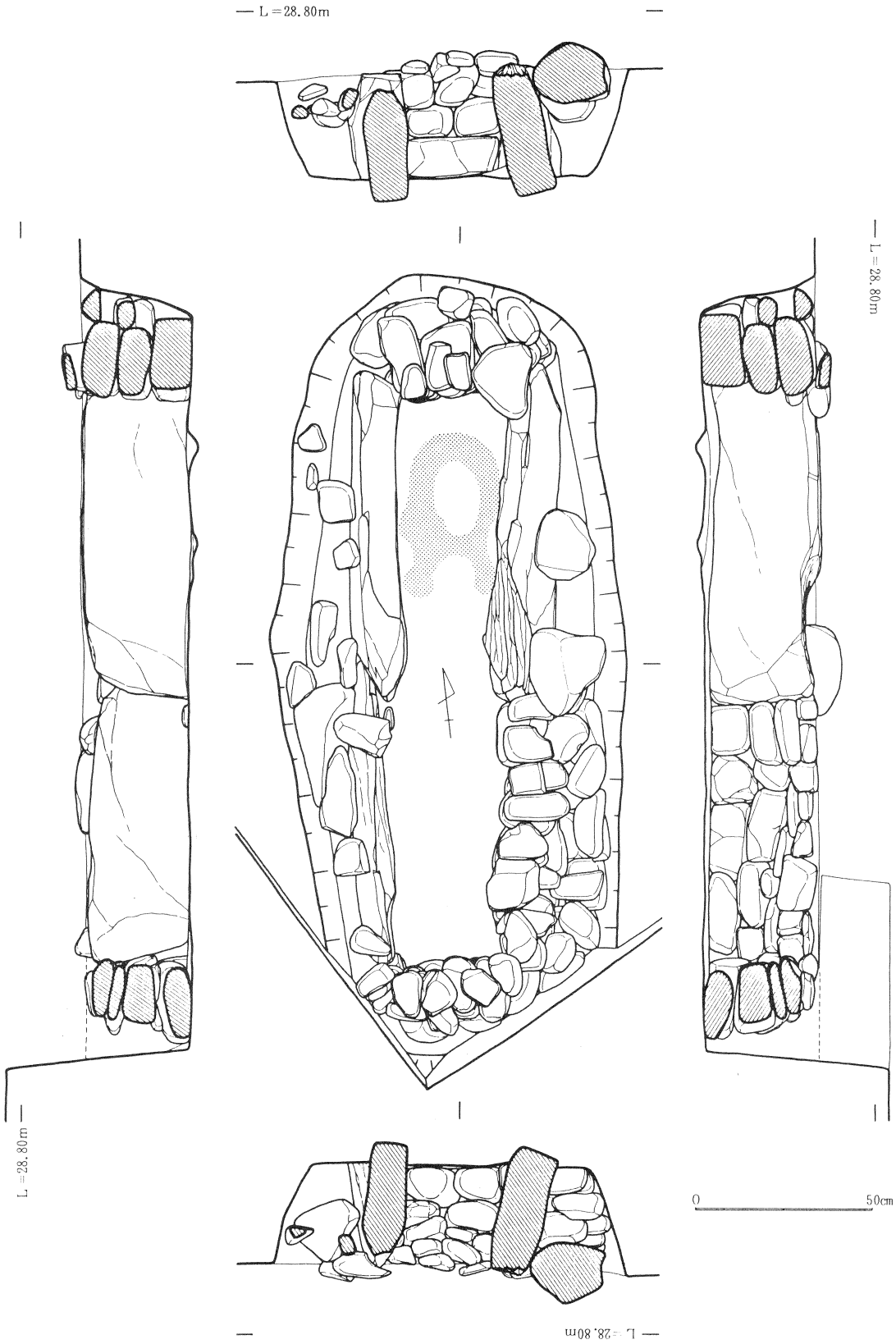
第８図 第１調査区平面図



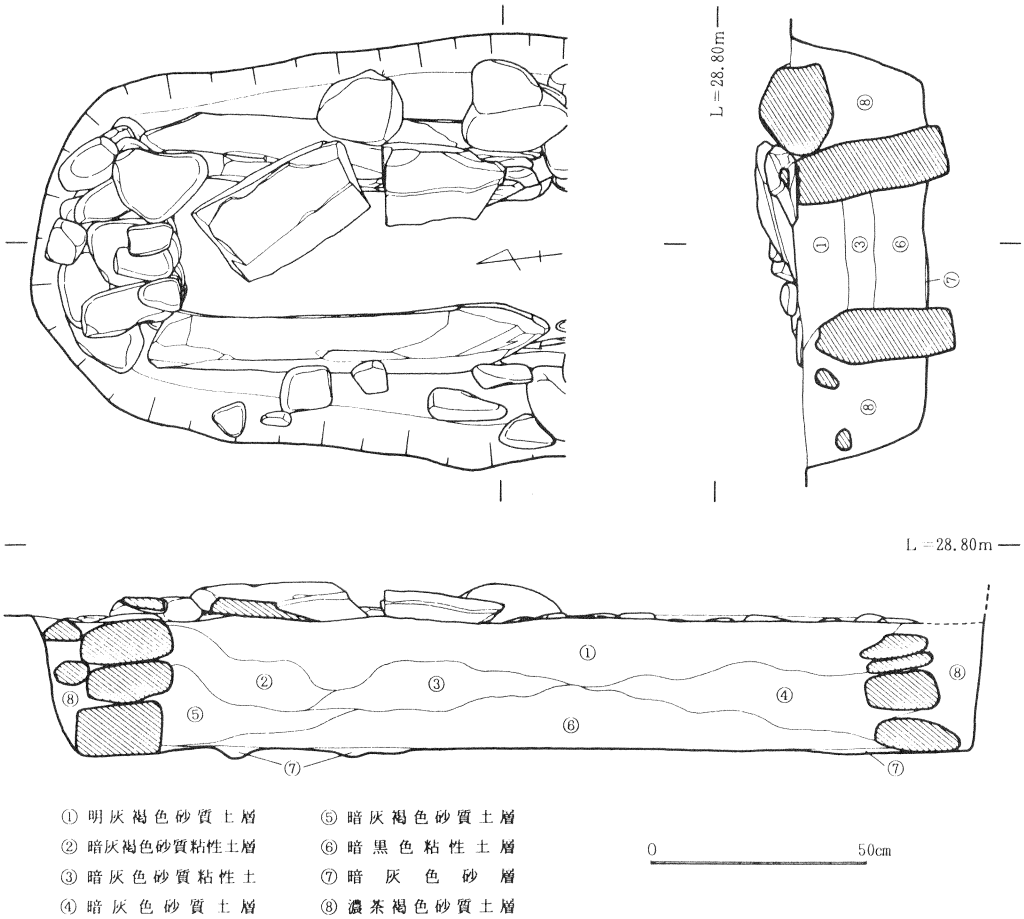
① 暗灰色砂質粘土層（耕作土）
② 暗灰褐色砂質粘土層
③ 地山（マンガン結核による変色部分）
④ 攪乱層（TR－01）
⑤ 暗灰褐色砂質土層
⑥ 暗灰色砂質土層
⑦ 暗黒色砂層
⑧ 灰褐色砂質土層
⑨ 暗黒色砂質土層
⑩ 暗灰色砂質土層
⑪ 暗灰褐色砂質土層
⑫ 暗黒色砂層

0 ―― 2m

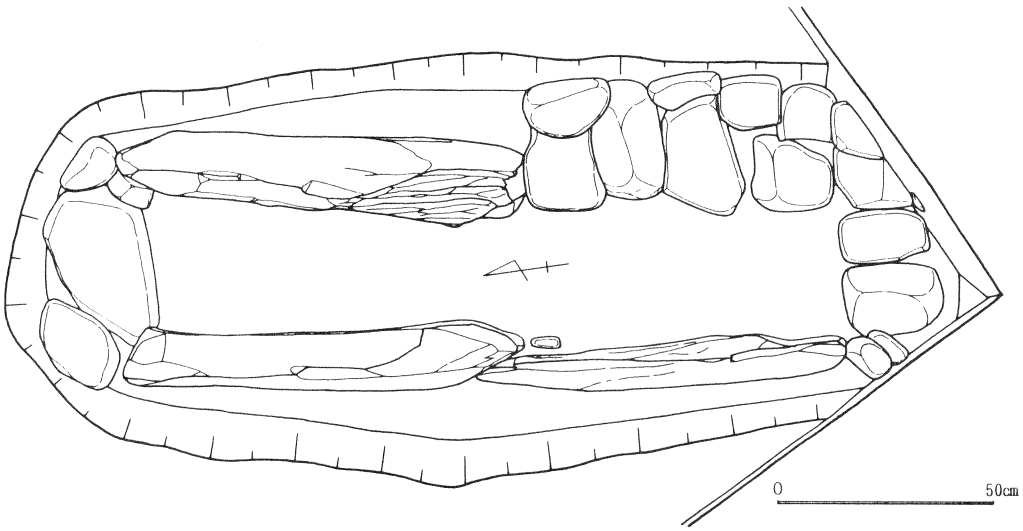
第9図 第1調査区土層図



第10図　ＳＸ－０１実測図　　枕状遺構



第11図　ＳＸ－０１蓋石残存状況・土層実測図



第12図　ＳＸ－０１基底部実測図

② 第２調査区： 第２調査区は住宅跡地であり、既に遺構が破壊されてしまっているのではないかという懸念はあったが、花コウ土と砂礫の構築層を除去したところ耕作土層が現われ、更にこの層を取り除くと、第１調査区で確認されたのと同じレベルで遺構面が確認できた。遺構の遺存状況は比較的良好で、調査区の北西隅では第１調査区南西隅で検出されたST-01の続きが確認され、北東隅では新たに第２号竪穴住居跡(ST-02)が確認できた。

しかしながら調査区の南西側遺構面の大半は黒く変色しており、大きな溝状の落ち込みがあることが考えられたが、この溝が埋没した後に構築された筈の竪穴住居や柱穴群との切り合い関係が全く認められず遺構の検出は困難を極めた。そこで、遺構が複合している部分に簡単なトレンチを設定し、徐々に掘り下げながら遺構の検出に努めた。

結果、第２調査区では自然流路と考えられる大きな溝状遺構(SD-02)とそれに伴う小さな溝状遺構(SD-01･SD-03)が埋没した後に、竪穴住居跡２棟(ST-01･ST-02)と多数の柱穴群が築かれたことが判明した。また調査区の南東隅には近世の廃棄土坑が確認されている。

ST-01：ST-01は第１調査区の南西隅から第２調査区の北西隅にかけてその東半分が検出できた。その規模と形態は第１調査区での説明のとおり、直径が約８ｍの不整円形を呈する竪穴住居跡で、出土した遺物から弥生時代後期後半に機能し廃絶したと考えられる。

ST-02：ST-01から東に1ｍほどの間隔を置いて検出された隅丸方形の竪穴住居跡で、一部分しか検出できていないが、一辺が3～4ｍで Ｎ-30°-W方位に主軸方位を持つと推定される。また、西壁に沿って幅70cm・高さ10cm程のベッド状遺構と、南壁に沿って幅15～20cmのＵ字形の断面を呈する溝が検出されている。

ST-02の南西隅からは高坏・台付き鉢・鉢がそれぞれほぼ完全な形で出土しているが、いずれも⑪濃灰色砂質粘土層が堆積した後に置かれたもので、この後⑩灰褐砂質土層が堆積していることから、この住居が廃絶し埋没途上でここに置かれたと考えられる。(第15図参照) また、このような例は住居の廃絶に伴う祭祀の痕跡として彼ノ宗遺跡などでの報告例が知られている。

この他にもST-02の埋土上層･下層全体に弥生時代後期後半頃の土器片が多量に包含されており、これらの遺物から見て、ST-02は弥生時代後期後半に機能し廃絶したと考えられる。また、埋土下層からは鉄器片が１点出土している。(第40図･第75図･第76図参照)

SD-01：第２調査区の北端で東西方向に流れる幅35～40cm、深さ8cmほどの溝状遺構で、遺存状況はSD-03と酷似している。

SD-02：第２調査区だけの検出範囲では溝跡か凹地跡かの判別は困難であるが、この遺構は第３～５調査区まで続けて検出されたため、その規模･構造等がある程度把握できた。

結果、SD-02は南東から北西方向に流れる幅約8～10ｍ・最も深い部分で70cm程の自然流路で第２調査区内で西へ向きを変えることが判明した。

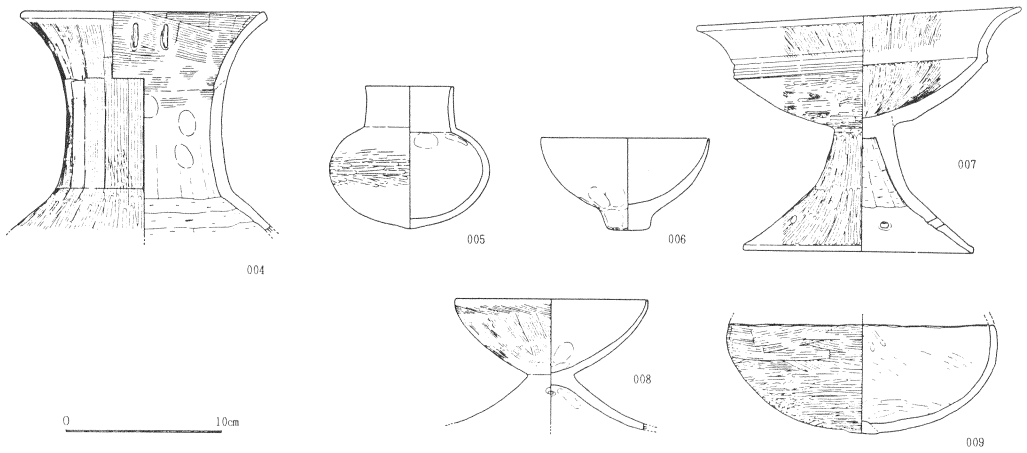
SD-02の埋土は下層が㉒黒色粘性砂質土層、上層が⑳黒色粘性土層の2層(第15図参照)に大別できるが、第２調査区内では下層と上層との間から小型の壺と鉢が出土している。これは出土状況から下層が堆積後に溝に投げ込まれたと考えられるが、この小型の鉢と接して１cm程の炭化した桃の種子(第79図参照)が１点出土しており、善通寺西遺跡や彼ノ宗遺跡等の例からみて、これも溝という生活関連施設の廃絶に伴う祭祀の痕跡と考えられる。この周辺の土層には炭化物片が他にも認められ、複数の桃の種子の存在も考えられる。

また、SD-02の埋土上層･下層いずれからも弥生時代中期から後期中葉にかけての土器片が多量に出土しており、両層の堆積状況が不自然で不規則に小礫を含んでいることなどから、人為的に埋め戻された可能性が高い。従って、出土した2点の土器と桃の種子を用いた祭祀は溝の埋め戻しの途中で行われたのではないかと推測される。

また、この地区の弥生以前の比較的大型の旧河道は、総じて西～南西から東～北東方向に流れる傾向があることを併せて紹介しておく。

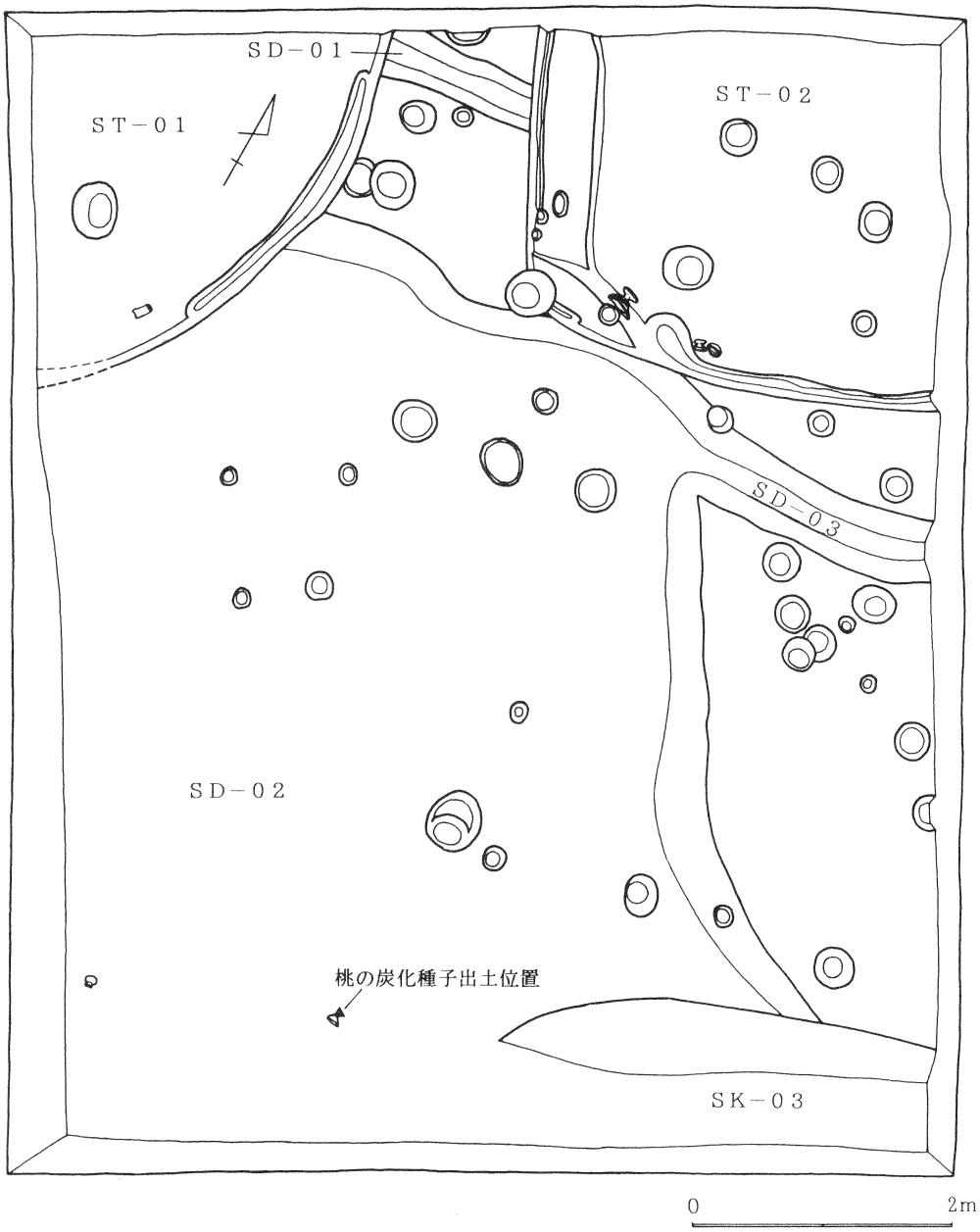
SD-03：SD-03は幅50～60cm・深さ30cmほどの溝状遺構で、東から西に向いSD-02に流れ込む。SD-02は自然流路と考えられるが、SD-03については人工の生活排水路ではないかと考えられる。

その他の遺構：第２調査区中央に集中する柱穴群はその遺存状況から見て弥生時代後期頃の所産であり、部分的に方形に配置されているものも認められ、高床式倉庫等の存在も考えられる。また、南東隅で検出された土坑(SK-03)は、近世の瓦や染め付け陶器類の他、木片･炭化物を多量に含む廃棄土坑である。

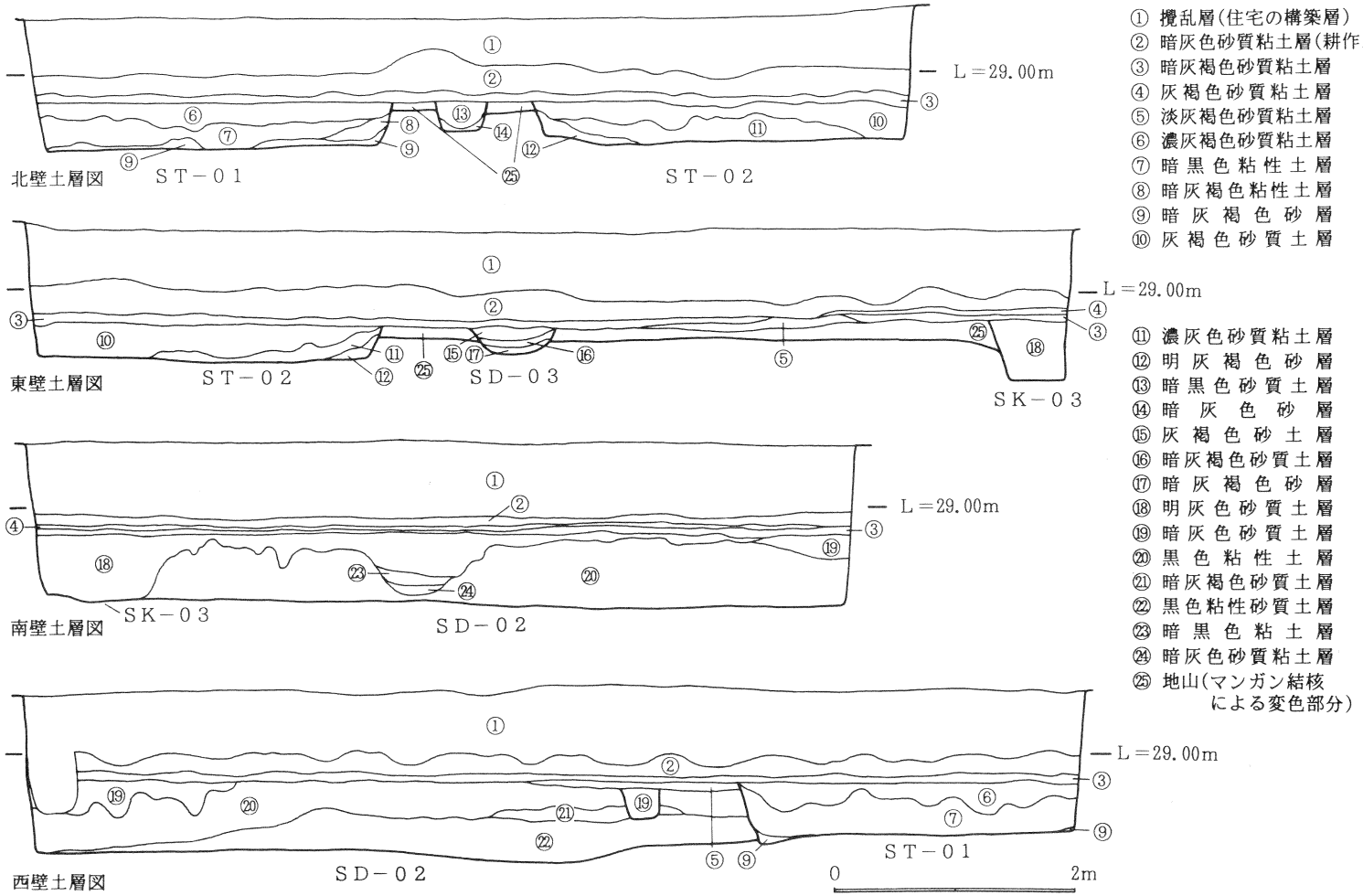


(004…ST-01出土　005･006…SD-02出土　007～009…ST-02出土)

第13図 第２調査区出土遺物実測図



第14図 第２調査区平面図



第15図 第２調査区土層図

③ 第３調査区： 第３調査区も住宅跡地であるが第２調査区同様に遺構の遺存状況は比較的良好で、調査区の北側で第３号竪穴住居跡(ST-03)、ST-03の南側に1.3m程の所で小児壺棺墓(SX-02)、西壁沿いで第４号竪穴住居跡(ST-04)の一部、東壁沿いで第５号竪穴住居跡(ST-05)の一部、南壁沿いで第６号竪穴住居跡(ST-06)の一部が確認されている。ただ、第２調査区同様に溝状遺構(SD-02)が調査区の大半にかかっており、ST-05とST-06はSD-02検出途中で確認されている。

結果、第３調査区ではSD-02が廃絶し埋没した後にST-03～ST-06、SK-05、SX-02が構築されていることが判明した。

ST-03：ST-03は東西に4.5m・南北に4.2mの隅丸方形の竪穴住居跡でN-8°-Wに主軸方位を持つ。住居内では壁面に沿って幅10～15cmほどのU字形の断面を呈する溝と、床面中央で炉跡ではないかと考えられる炭化物を多く含む窪みが検出されている。 ST-03の埋土中からの出土遺物は比較的少なかったが、南西隅の床面直上から分割を試みた跡がある砥石と壺形土器の体部の一部、床面からやや離れた Ⅶ暗黒色砂質土層（第18図参照)から小型の浅鉢と大型の鉄鏃(第40図･第75図･第76図参照)がそれぞれ完全な形で出土している。

出土した遺物から見るとST-03は弥生時代終末期頃に機能し廃絶したと考えられる。また、土層観察用畦を削っている際にⅡ暗灰色砂質土層(第18図参照)から1cm程の”鏃”ではないかと考えられる小さな青銅器片が出土している。(第55図･第79図参照) 弥生時代後期末頃の住居跡から青銅器が出土した例は、この周辺では彼ノ宗遺跡での銅鏃2点(溝等を含めると4点)･仿製内行花文鏡片(懸垂鏡)1点が知られている。

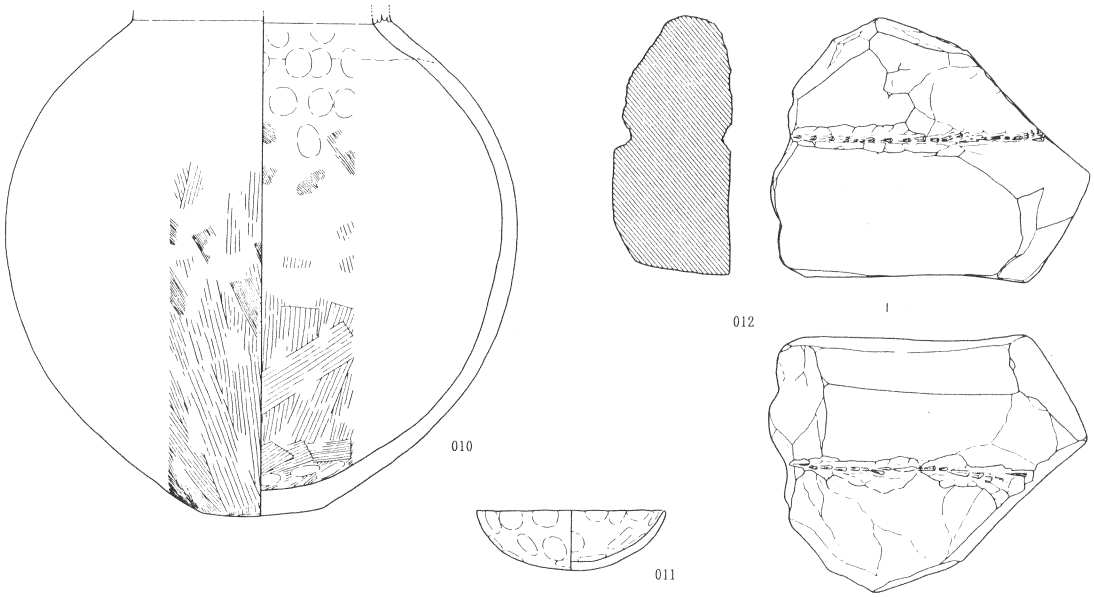
ST-04：ST-04は調査区の西壁沿いで一部分だけが検出された隅丸方形の竪穴住居跡で、ST-03とほぼ同一の主軸方位を持つ。 検出された範囲が狭く出土遺物も無いため、規模や時期を明確にすることはできていない。

ST-05：ST-05は調査区の東壁沿いで西側約1/4が検出された隅丸方形の竪穴住居跡で、規模は南北に約3.5m、N-27°-Wに主軸方位を持つ。 住居内では壁面に沿って幅5～20cmほどのU字形の断面を呈する溝と、北壁沿いに幅70cm･高さ8cm程のベッド状遺構が検出されている。

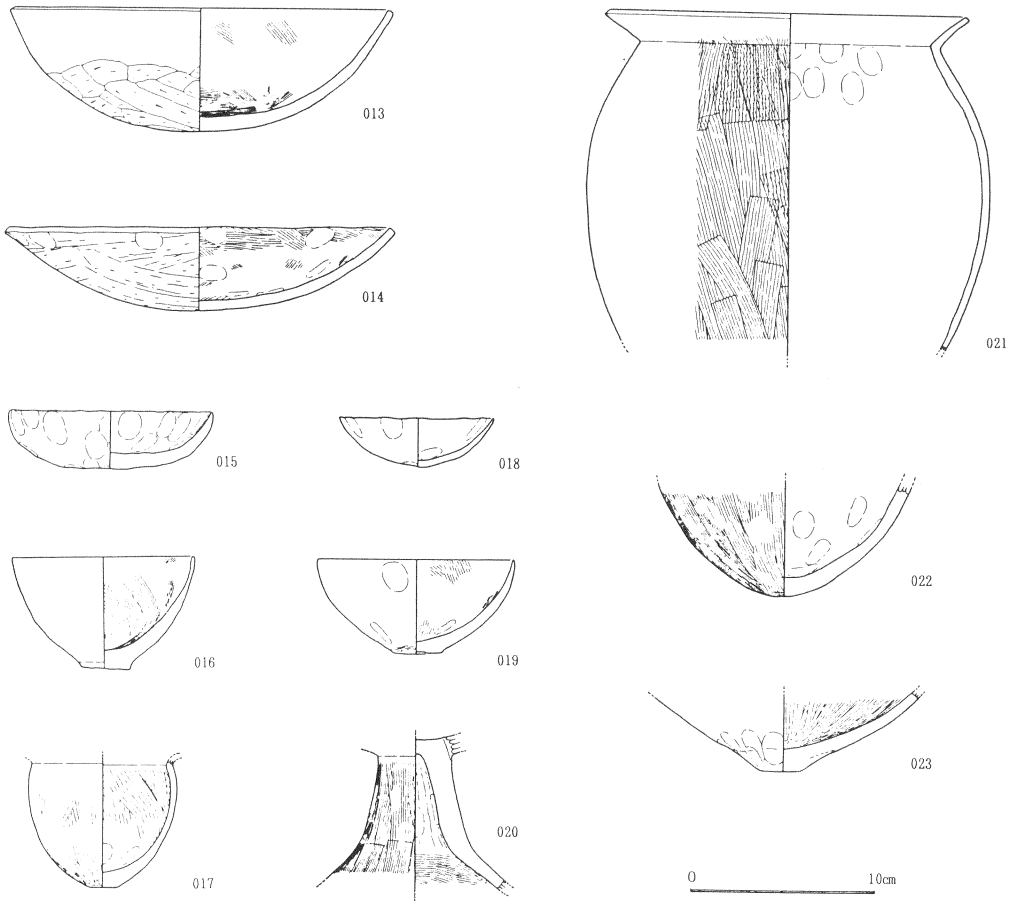
ST-05の床面直上からは焼土・炭化物と伴に変質した弥生時代後期末頃の鉢･甕等が多数出土している。従ってST-05は弥生時代終末期頃に機能し、火災によって焼失したものではないかと考えられる。

ST-06：ST-06は調査区の南壁沿いで検出された隅丸方形の竪穴住居跡の一部であるが、その殆どは第４調査区に遺存している。説明は24頁で行う。

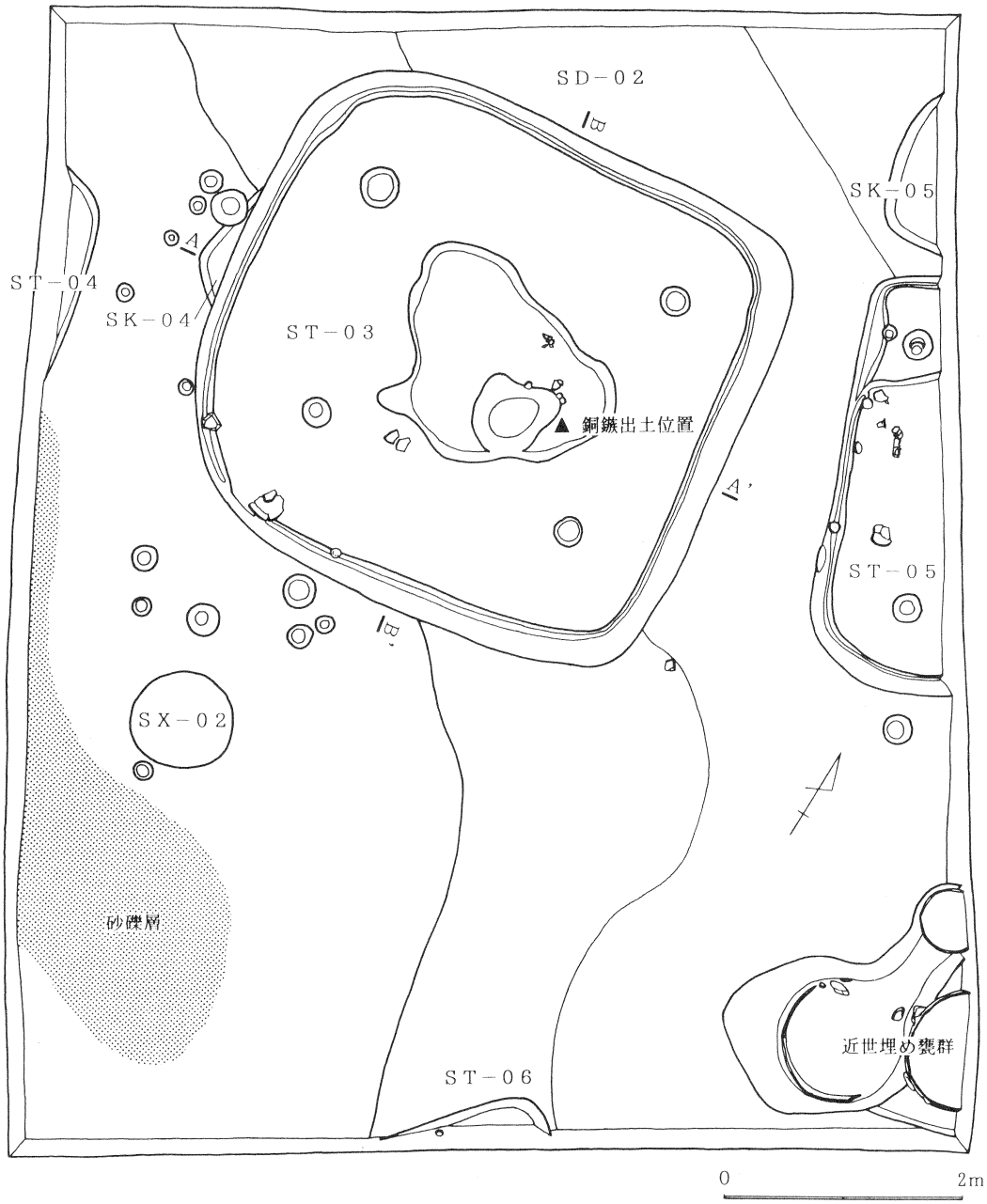
SK-05：SK-05はその遺存状況から見てST-05に伴う施設ではないかと考えられるが、遺物等は全く出土しておらず詳細は不明である。



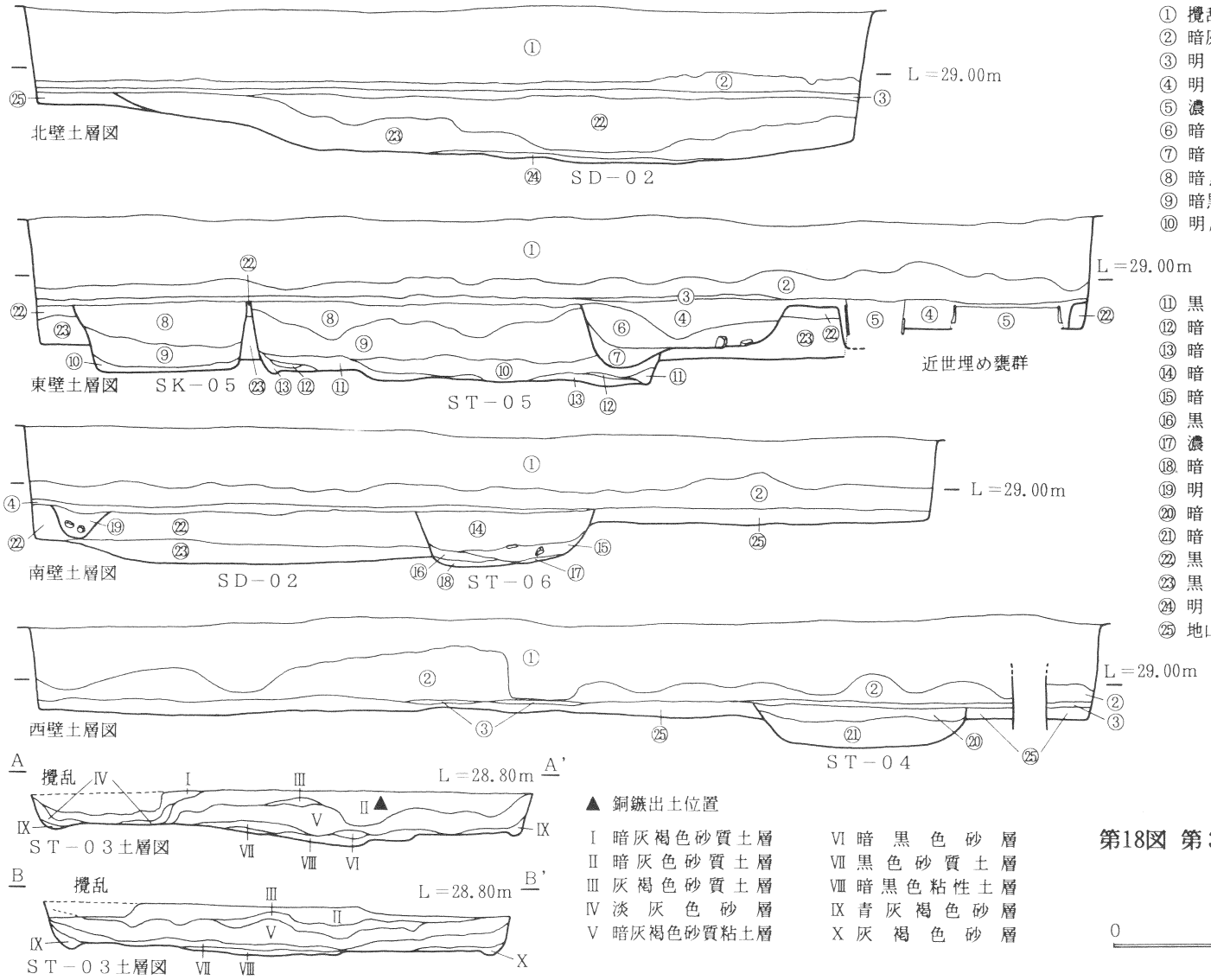
(010～012…ST-03出土　013～023…ST-05出土)



第16図 第３調査区出土遺物実測図



第17図 第３調査区平面図



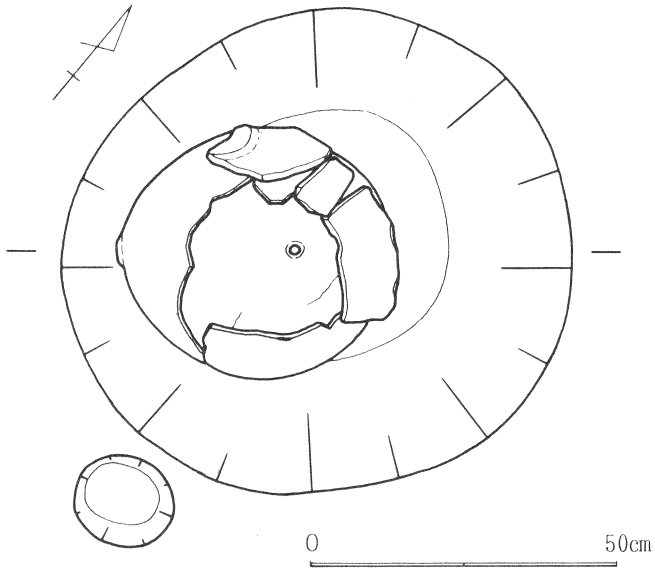
① 撹乱層(住宅の構築層)
② 暗灰色砂質粘土層(耕作土)
③ 明灰褐色砂土層
④ 明灰褐色砂質土層
⑤ 濃灰褐色砂質土層
⑥ 暗灰色粘性土層
⑦ 暗褐色粘性土層
⑧ 暗黒色粘性砂質土層
⑨ 暗黒褐色粘性砂質土層
⑩ 明灰褐色砂質粘土層
⑪ 黒褐色砂質土層
⑫ 暗黒色粘土層
⑬ 暗灰褐色土層
⑭ 暗灰褐色砂質土層
⑮ 暗黒色土層
⑯ 黒褐色土層
⑰ 濃褐色土層
⑱ 暗黒色砂質土層
⑲ 明灰色砂質土層
⑳ 暗灰褐色砂層
㉑ 暗灰色砂層
㉒ 黒色粘性土層
㉓ 黒色粘性砂質土層
㉔ 明灰色砂礫層
㉕ 地山(マンガン結核による変色部分)

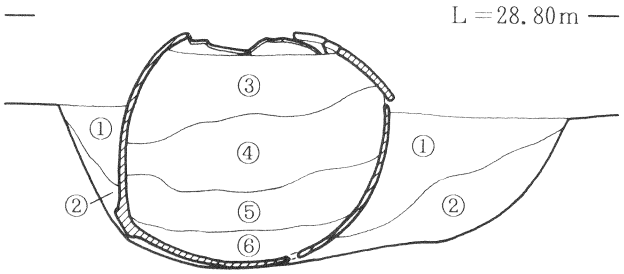
▲ 銅鏃出土位置

Ⅰ 暗灰褐色砂質土層
Ⅱ 暗灰色砂質土層
Ⅲ 灰褐色砂質土層
Ⅳ 淡灰色砂層
Ⅴ 暗灰褐色砂質粘土層
Ⅵ 暗黒色砂層
Ⅶ 黒色砂質土層
Ⅷ 暗黒色粘性土層
Ⅸ 青灰褐色砂層
Ⅹ 灰褐色砂層

第18図 第３調査区土層図

0　2 m





① 明灰砂質土層　④ 明灰色砂質土層
② 暗灰砂質土層　⑤ 暗灰色砂質土層
③ 明灰褐色砂質土層　⑥ 暗黒色粘性土層
（赤色顔料を多量に含む）

第19図　ＳＸ－０２実測図

小児壺棺墓（SX-02）：第３調査区中央からやや西寄りで検出された小児壺棺墓である。

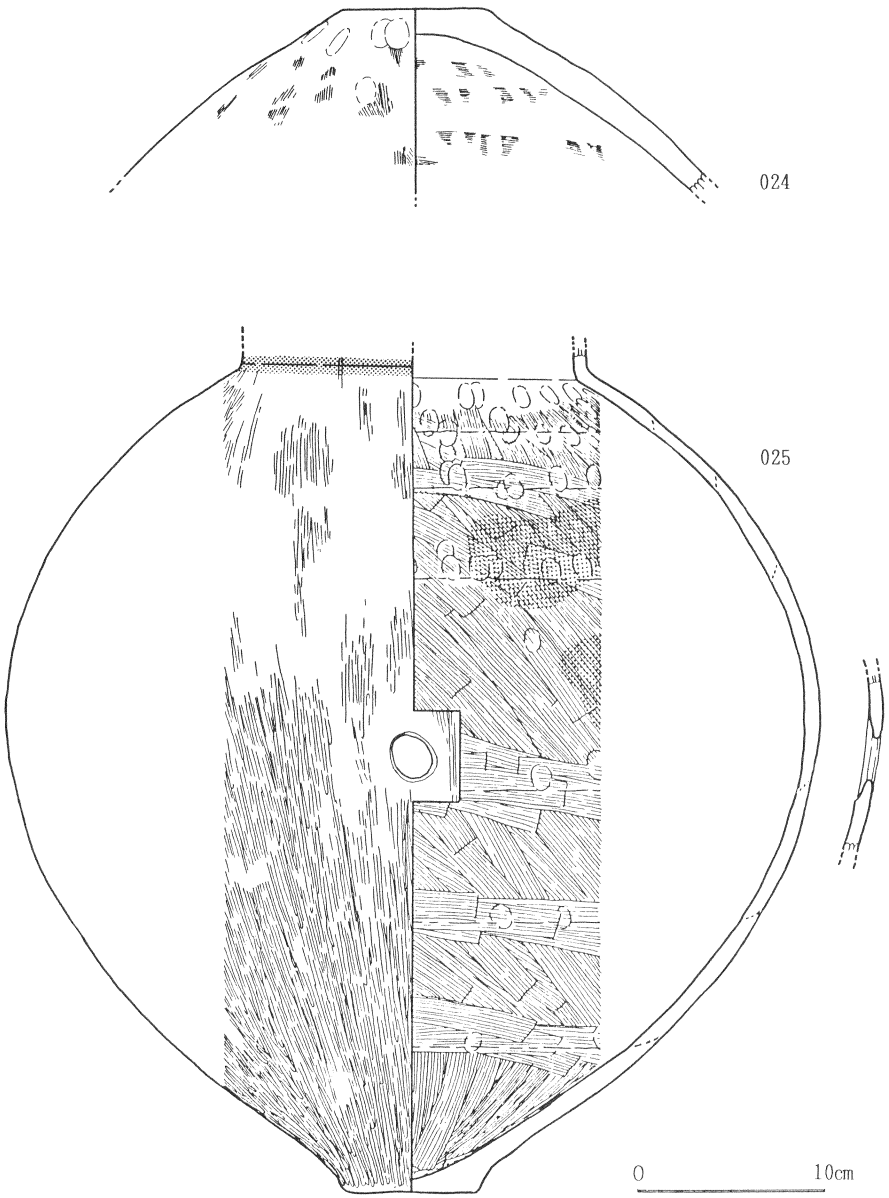
遺構が削平を受けているため蓋に転用された土器は大半を失ってはいたが、遺存状況は比較的良好であった。壺棺の主軸は56°、N-50°-E方位に傾いている。

壺棺は埋葬状態での最下部に径が2～3cm程の楕円形を呈する孔が認められたが、その状況から、墓壙内に棺を納める前に外部から穿孔したものであることがわかる。

小児壺棺の発見例は善通寺市内だけでも50例を超えている。この内殆どのものに穿孔例が報告されているが、その位置や数が一定しておらず、孔が意図するものは不明である。ただ、当地区では成人の壺･甕棺葬は確認されておらず、日常生活で恐らく貯蔵用として用いられていた大型の壺・甕を小児に限った埋葬施設に転用している点は注目できる。

また、SX-02棺内の埋土最下層の⑥暗黒色粘性土層は壺棺上部が削平によって破壊される以前に長期間かけて堆積したもので、含まれる赤色顔料のため鮮やかな赤色に染まっていた。赤色顔料は埋葬状態での壺棺内面上部にも付着しており、小児の遺体に直接塗布されていたものが、遺体の風化と伴に内部に沈殿したものではないかと推定できる。赤色顔料が内面に付着した小児壺棺はこれまでにも数例知られていたが、今回程多量に確認されたことはない。また、壺棺は他の類例と同様に頸部から上を人為的に取り除かれているが、この部分(外面)に帯状に赤色顔料が塗布されており意図的な装飾ではないかと考えられる。

SX-02は使用された壺形土器の形態から、弥生時代後期末頃の所産と考えられる。



第20図　ＳＸ－０２出土壺棺実測図　（ ▒ 赤色顔料付着範囲 ）

その他の遺構：SD-02から目立った遺物の出土は無いが、遺構面上部の攪乱層から直弧文状図文の線刻が施された弥生土器片が出土している。（第40図･第73図参照）

また、調査区南東隅で近世の埋め甕が3点検出されている。

④ 第４調査区： これまでと同様の遺構の遺存状況が確認された。調査区内をほぼ南北に縦断するSD-04とこれと直交するSD-05の検出は比較的容易であったが、第２・３調査区同様SD-02が調査区の大半を占めているため、これと複合する遺構検出は困難を極め、調査区の南東隅に本来SD-04と平行し遺存していた筈のSD-06、はSD-02の検出後の壁面土層実測作業の際に確認された。ST-06も西半分は容易に検出できたが東側の検出は難しく、ST-07･ST-08もSD-02の検出後にその存在が確認できた。結果､第４調査区では自然流路と考えられる大きな溝状遺構(SD-02)が埋没した後に竪穴住居3棟(ST-06･ST-07･ST-08)が構築され､その廃絶後に人工の水路(SD-04･SD-05･SD-06)が掘り込まれていることが判明した。

ST-06：北西-南東に5m･南西-北東に5.5mの隅丸方形の竪穴住居跡でN-33°-Eに主軸方位を持つ。住居床面は砂礫層となり柱穴等の遺構の判別ができず、後に部分的にトレンチ探査を実施したが検出できていない。埋土中には弥生時代中期から後期末にかけての土器片が多量に混入していたが、主に南西壁面に沿っての床面直上から良好な一括資料が得られた。特に底部が貫かれた甕と鉢の伏せて並べられた状態での出土は、これまでに市内で確認されている弥生時代終末期の廃絶住居確からの土器の特異な出土状況と共通している。ST-06は出土した遺物から見て、弥生時代終末期頃に機能し廃絶した考えられる。

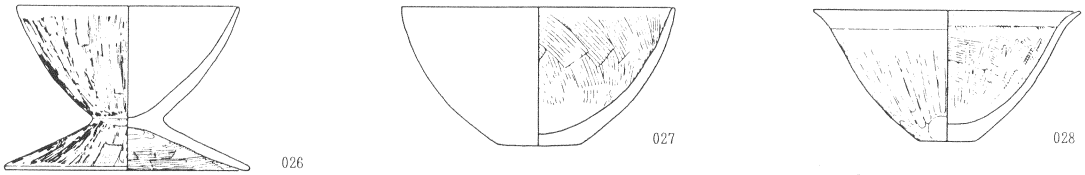
ST-07：実際はSD-02埋没後に構築されているが上面での検出ができず、SD-02の検出途中で確認された隅丸方形の竪穴住居で、主軸方位をN-12°-Wに持つ点以外 規模等は不明であるが、３点の弥生土器がほぼ完全な形で出土しており、弥生時代後期末頃に機能し廃絶したと考えられる。

ST-08：第４調査区南端から第５調査区北端にかけて検出された隅丸方形の竪穴住居で、東西に約3m･南北に4.5mでN-5°-Eに主軸方位を持つ。 住居内では東壁面に沿って幅10cm程のU字形の断面を呈する溝が一部で検出され、床面直上から数点の弥生土器が出土している。 出土した土器から見てST-08は弥生時代後期前葉に機能し廃絶した考えられる。

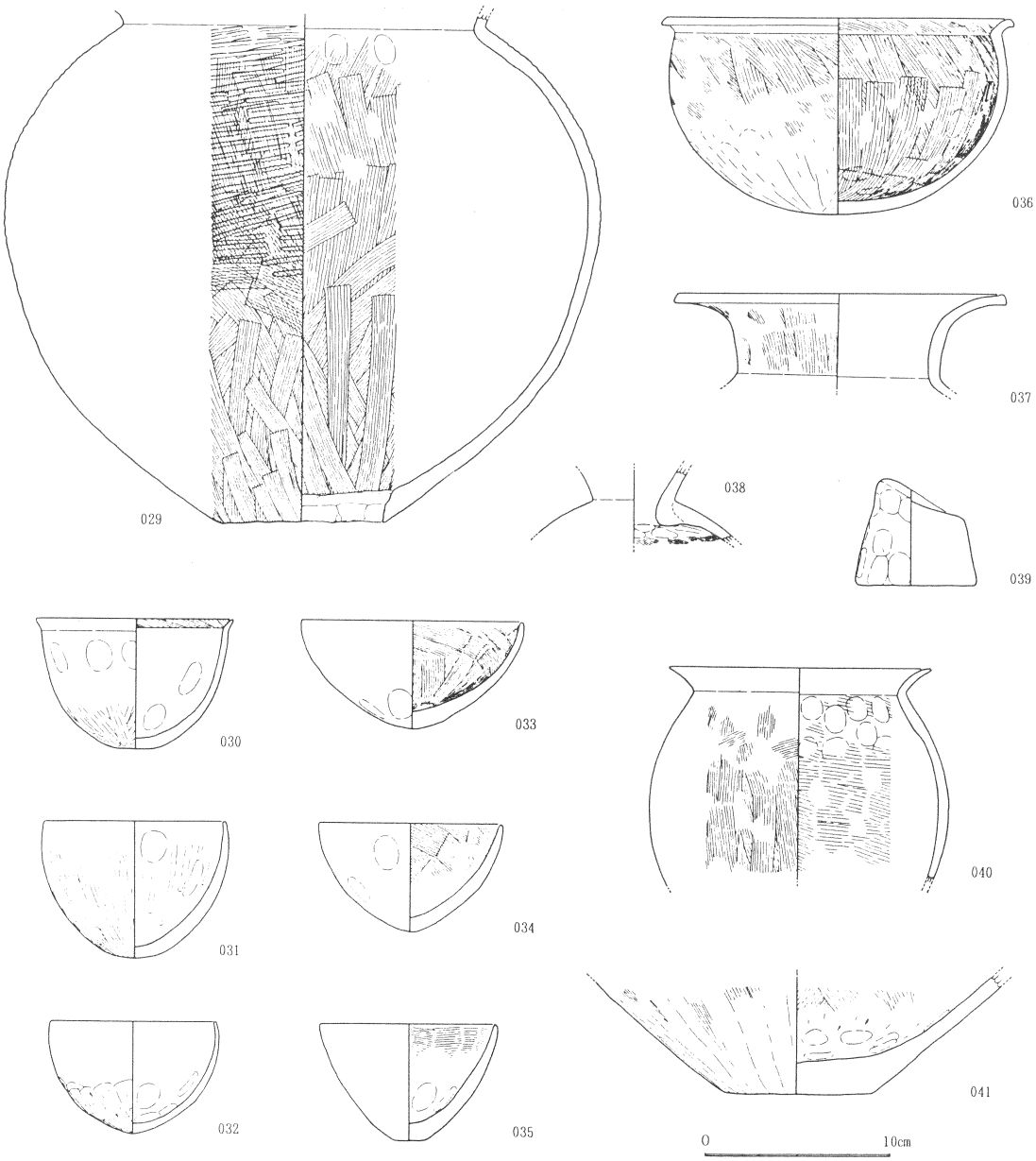
SD-04：調査区内を縦断する形でほぼ南北に直線的に遺存する人工の水路跡で、その規模は幅1～1.5m･深さ約1mを計る。上部断面はV字形を呈しているが底部は凵形で、埋土の断面を観察した結果自然に埋没したことがわかる。SD-04の埋土中からは弥生時代中期から後期末にかけての土器片が多量に出土したが、これは廃絶後に周辺の遺構から混入したもので、SD-04の機能した時期を知ることはできない。 ただ、出土遺物中に数点の須恵器片が含まれていたことから、古墳時代の所産と考えられる。

SD-05：SD-05は東からSD-04に流れ込む溝で、調査区の東端では浅いU字形の断面形を呈しているが、西に向い深く落ち込み断面形をV字形に変えSD-04と合流する。SD-04と同様古墳時代の所産である。

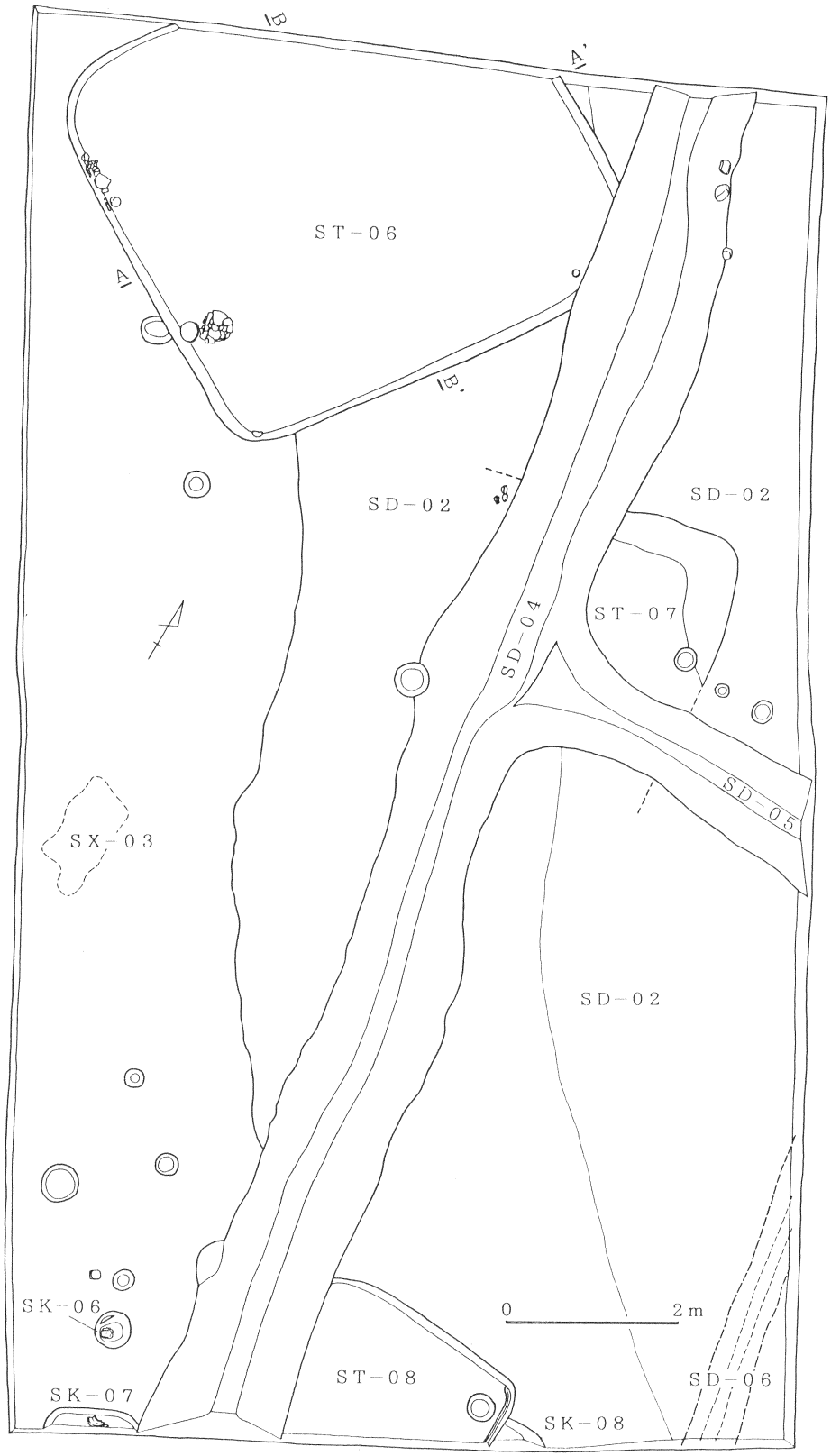
SD-06：SD-06はSD-02の埋土上に遺存していたため当初は確認されていなかったが、SD-



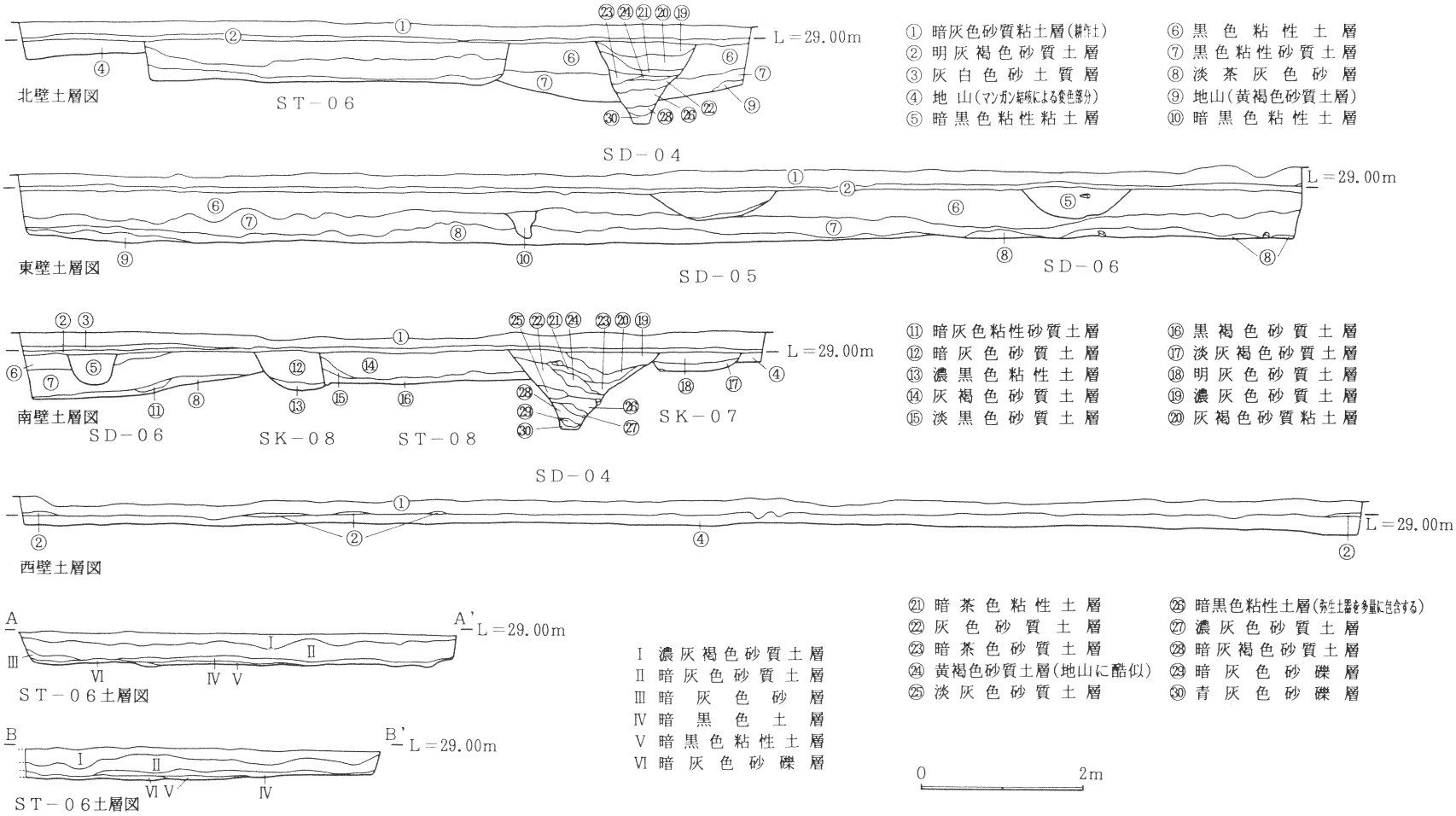
(026～028…ST-07出土　029～041…ST-06出土)



第21図 第４調査区出土遺物実測図



第22図 第４調査区平面図



① 暗灰色砂質粘土層（耕作土）
② 明灰褐色砂質土層
③ 灰白色砂土質層
④ 地山（マンガン結核による変色部分）
⑤ 暗黒色粘性粘土層
⑥ 黒色粘性土層
⑦ 黒色粘性砂質土層
⑧ 淡茶灰色砂層
⑨ 地山（黄褐色砂質土層）
⑩ 暗黒色粘性土層
⑪ 暗灰色粘性砂質土層
⑫ 暗灰色砂質土層
⑬ 濃黒色粘性土層
⑭ 灰褐色砂質土層
⑮ 淡黒色砂質土層
⑯ 黒褐色砂質土層
⑰ 淡灰褐色砂質土層
⑱ 明灰色砂質土層
⑲ 濃灰色砂質土層
⑳ 灰褐色砂質粘土層
㉑ 暗茶色粘性土層
㉒ 灰色砂質土層
㉓ 暗茶色砂質土層
㉔ 黄褐色砂質土層（地山に酷似）
㉕ 淡灰色砂質土層
㉖ 暗黒色粘性土層（赤生土器を多量に包含する）
㉗ 濃灰色砂質土層
㉘ 暗灰褐色砂質土層
㉙ 暗灰色砂礫層
㉚ 青灰色砂礫層

Ⅰ 濃灰褐色砂質土層
Ⅱ 暗灰色砂質土層
Ⅲ 暗灰色砂層
Ⅳ 暗黒色土層
Ⅴ 暗黒色粘性土層
Ⅵ 暗灰色砂礫層

第23図 第4調査区土層図

02検出後の壁面土層実測作業の際に確認された。SD-06はU字形の断面形を呈する溝で、SD-04との間に4.5～5mの間隔を置いて平行に流れる幅50cm・深さ40cm程の人工の水路である。出土遺物等は数点の弥生土器片のみであるが、機能し廃絶した時期もSD-04・SD-05とほぼ一致するものと考えられる。

SK-06：柱穴状の形態を呈しているが、遺物の出土状況から土坑とした。

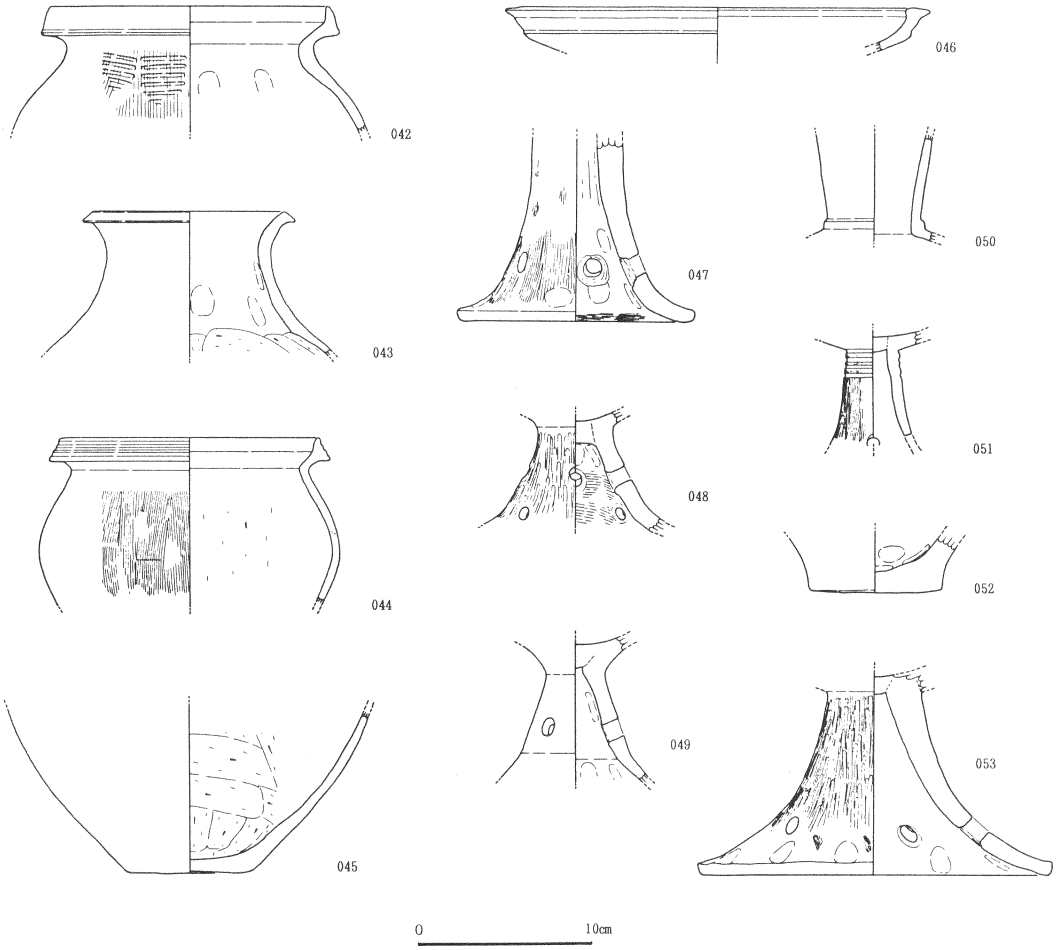
SK-07：SK-07は第４調査区の南壁沿いで検出された土坑で、弥生時代中期中葉頃の壺形土器の口縁部が出土している。

SK-08：SK-08からは土器片等は出土していないが、楔形の鉄器がほぼ完全な状態で出土している。（第40図・第75図・第76図参照）SK-08はST-08に切られていることから、弥生時代後期前葉以前の所産と考えられる。

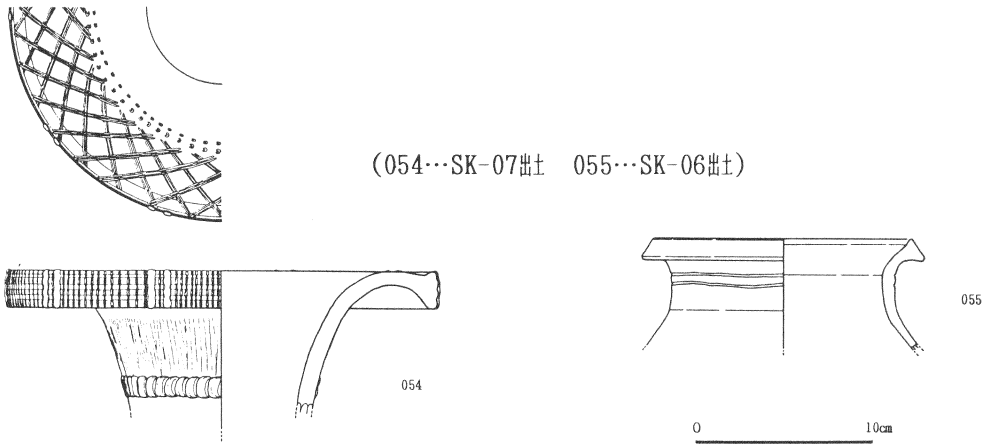
集 石 遺 構（SX-03）：SX-03は第４調査区中央の西壁沿いで検出された多量の弥生土器を含む集石遺構造で、磁北方向に主軸を持ち長方形を呈している。下部に土壙等は認められなかったが、遺構面上の変色部分を除去した際に遺物を残して遺構を取り除いてしまった可能性がある。その遺存状況等から墓の可能性を考えSX-03とした。

第24図 ＳＸ－０３実測図

その他の遺構：SD-02は調査区グリッドの設定方向に沿って南に延びているが、調査区の南端でやや西方向に向きを変えている。SD-02埋土中から目立った遺物の出土は無いが、第４調査区あたりから弥生時代中期から後期初頭にかけての遺物・遺構が多くなる。



第25図　ＳＸ－０３出土遺物実測図　（042～053）



第26図　ＳＫ－０６・０７出土遺物実測図

⑤ 第５調査区：第４調査区同様に耕作土直下で遺構が確認された。ここではSD-02が東に向きを変えるため、耕作土と遺構面上のマンガンによる変色部分を取り除くと、黄褐色砂質土層上面に第４調査区から続くST-08･SD-04･SD-06を始め、新たに竪穴住居跡２棟･多数の土坑・柱穴等の遺存状況がはっきりと認められた。

調査区の南で検出された多数の土坑群は埋土や出土遺物から見て近世の所産で、ここから第６調査区にかけてはこの時期の遺構が大半を占めるようになる。また、第１～４調査区までとは異なり弥生時代中期の遺構と遺物の比率が非常に大きくなる。

結果、SD-02が機能していた時期は不明であるが、弥生時代中期前葉のSK-11･SK-12とは共存していた可能性がある。そしてSK-11･SK-12廃絶後にSD-02が埋没し、続けてST-08､ST-10･SK-10､ST-09､SD-04･SD-06が順に機能し廃絶したことが判明した。

SD-04･SD-06：いずれも第４調査区から続けて検出された人工の溝で、直線的に南北に延びている。ただ、SD-06は北壁沿いでは幅70cm･深さ30cmを計るが、南壁沿いでは幅50cm･深さ10cmと規模が縮小し、SD-04も北壁沿いでは幅1.7m･深さ95cmを計るが、西壁沿いでは幅約1.3m･深さ70cmと規模が縮小する。これは南に向ってコンターが上がるのに加えて当初は遺構面が高かったものが、農耕等の必要性から削平されてしまった結果と考えられる。

第６調査区の南側は南東から北西に流れる大きな河道跡に当たり、コンターが変化しないか若しくはやや低くなる傾向にあるため、いずれにせよSD-04･SD-06の終点は第６調査区周辺にあると考えられる。しかし、残存する部分から見ると遺構はかなり削り取られており、何らかの構造物が検出できる可能性は極めて低いと思われる。

ST-08：第４調査区から続けて検出された隅丸方形の竪穴住居跡で、東西に約3m・南北に4.5mでN-5°-Eに主軸方位を持つ。 住居内では東壁面に沿って幅10cm程のU字形の断面を呈する溝が一部で検出され、床面直上から数点の弥生土器が出土している。出土した遺物から見てST-08は弥生時代後期前葉に機能し廃絶したと考えられる。

ST-09：調査区の北東隅東壁沿いで西半分が検出された竪穴住居跡で、最大径5mの不整円形若しくは多角形を呈している。住居床面南端で幅40～50cm・高さ5cm程のベッド状遺構、ベッド状遺構と南壁の間に幅15～20cm･深さ5cm程のU字形の断面を呈する溝状遺構が検出されたが、床面はやや荒い砂礫層となり柱穴等の遺構の判別ができず、後に部分的にトレンチ探査を実施したが検出できていない。

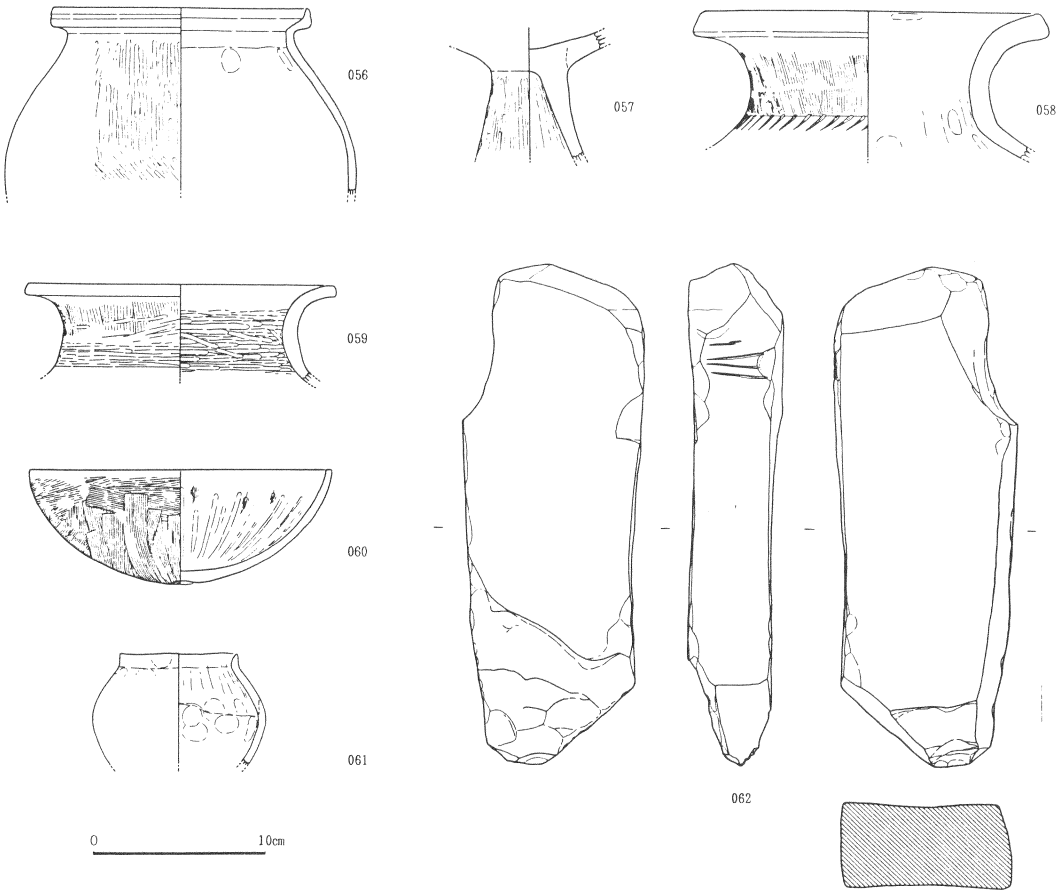
埋土中には弥生時代中期から後期末にかけての土器片が多量に混入していたがこの遺構に伴う遺物としては、南壁沿いのベッド状遺構上部から鉢が完全な形で１点と南西隅の床面直上から壺の頸部が出土しているだけである。

出土した遺物から見てST-09は弥生時代終末期頃に機能したと考えられる。

ST-10：調査区のほぼ中央で検出された南北に5.7m・東西に5.2mの不整円形を呈する竪穴住居跡で、この周辺は遺構面がかなり削平されているらしく住居の床面は遺構面から15cm程の位置で検出された。床面中央では炭化物を多量に含む埋土をもつ炉跡と、これを中心に円形に配置された柱穴が検出されている。また、住居の北西壁面部２カ所に内側に突出した、出入口を示す構造ではないかと推測される部分が認められた。

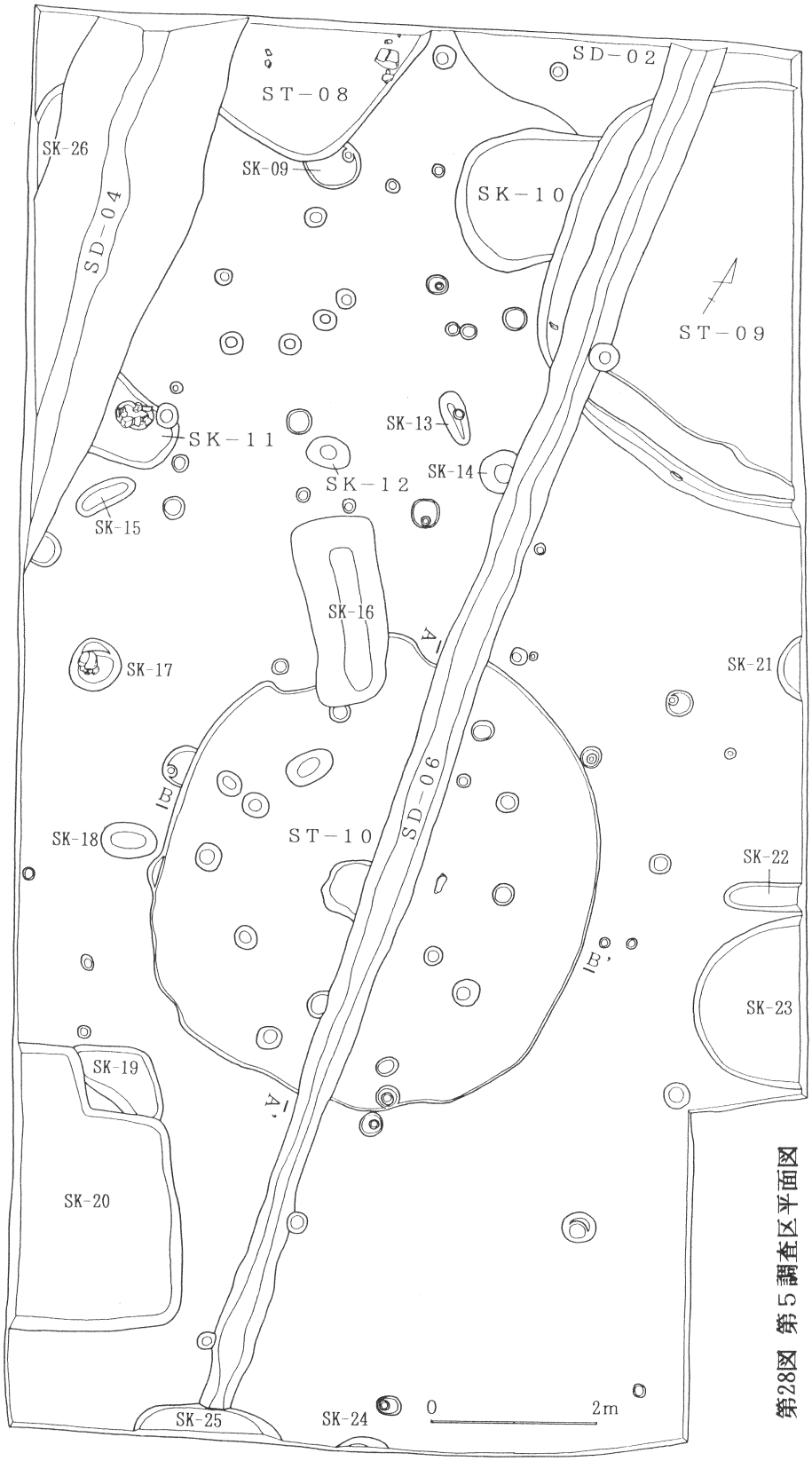
埋土中には土器片等は殆ど含まれておらず、床面直上からサヌカイト片多数の他、砥石・石包丁・石鏃が１点づつ出土しただけである。周辺の状況等と併せて、ST-10は弥生時代後期初頭から中葉までの間に機能し廃絶したと考えられる。

その他の遺構：第５調査区では近世の土坑が非常に多くなる。これらの遺構の埋土は小礫を多量に含む灰褐色砂層で、瓦や染め付け陶器の破片をわずかに含んでいる。（第28図中SK-16・SK-20～SK-25）

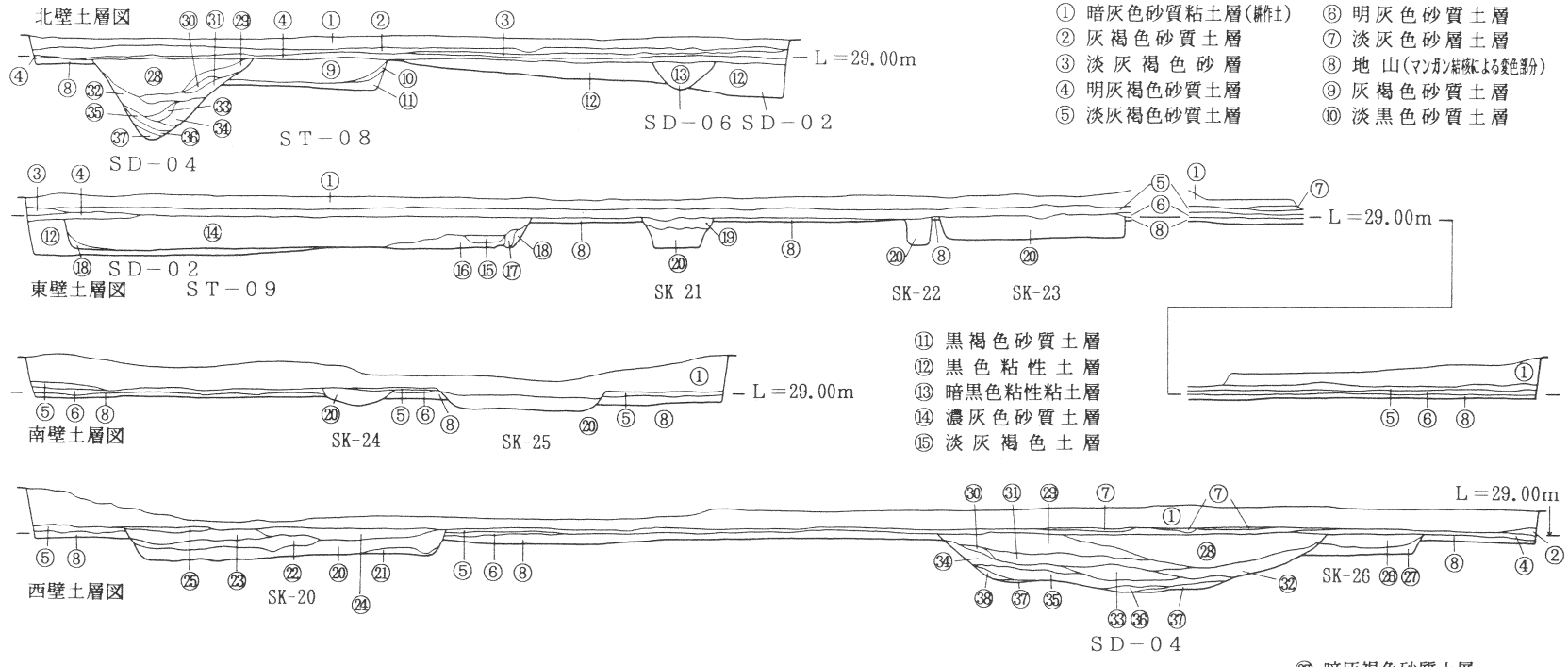


（056～058…ST-08出土　059・060…ST-09出土　061・062…ST-10出土）

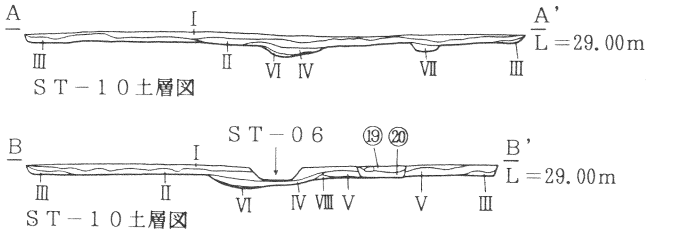
第27図 第５調査区出土遺物実測図



第28図 第5調査区平面図



① 暗灰色砂質粘土層(耕作土)
② 灰褐色砂質土層
③ 淡灰褐色砂層
④ 明灰褐色砂質土層
⑤ 淡灰褐色砂質土層
⑥ 明灰色砂質土層
⑦ 淡灰色砂層土層
⑧ 地山(マンガン結核による変色部分)
⑨ 灰褐色砂質土層
⑩ 淡黒色砂質土層
⑪ 黒褐色砂質土層
⑫ 黒色粘性土層
⑬ 暗黒色粘性粘土層
⑭ 濃灰色砂質土層
⑮ 淡灰褐色土層



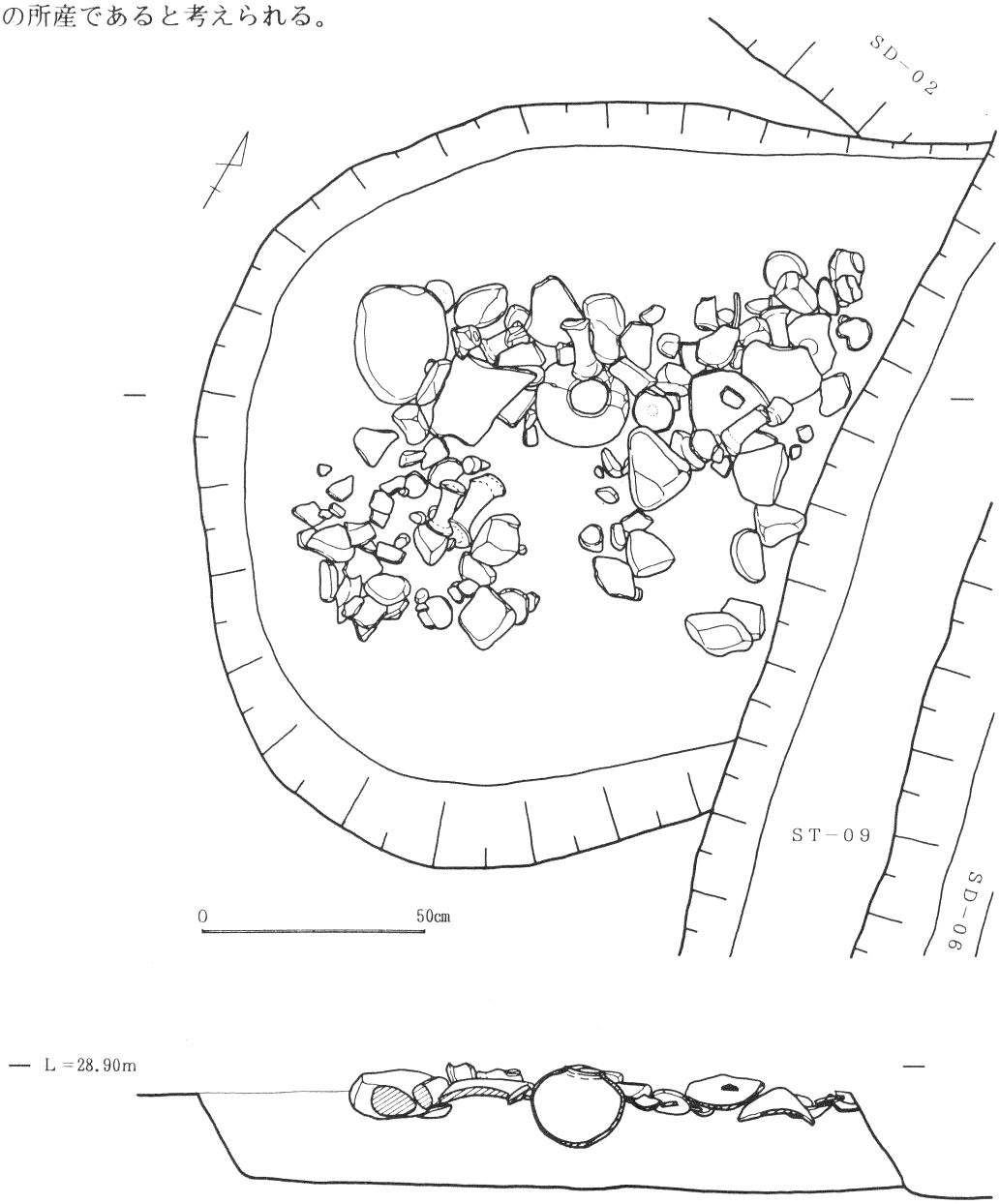
第29図 第5調査区土層図

Ⅰ 濃灰褐色砂質土層
Ⅱ 暗灰色砂質土層
Ⅲ 明灰色砂層
Ⅳ 暗黒色粘性土層
Ⅴ 濃灰色砂礫層
Ⅵ 暗灰色砂層
Ⅶ 濃灰色砂質土層
Ⅷ 暗黒色砂層

⑯ 灰褐色土層
⑰ 濃灰色砂層
⑱ 黒灰色砂質土層
⑲ 乳灰色砂質土層
⑳ 灰褐色砂層
㉑ 淡灰褐色砂層
㉒ 灰褐色砂質土層
㉓ 灰色砂質土層
㉔ 暗灰色砂質土層
㉕ 淡灰色砂層
㉖ 暗茶色砂質粘性土層
㉗ 暗灰褐色砂質土層
㉘ 濃灰色砂質土層
㉙ 灰褐色砂質粘性土層
㉚ 暗茶色粘性土層
㉛ 灰色砂質土層
㉜ 淡灰色砂質土層
㉝ 暗黒色粘性土層(赤生土器を包含)
㉞ 濃灰色砂質土層
㉟ 暗灰褐色砂質土層
㊱ 暗灰色砂礫層
㊲ 青灰色砂礫層
㊳ 茶灰色砂層

SK-10：第５調査区北東端で検出された北西-南東に1.6m･北東-南西に2m以上、深さ20cm程の規模をもつ廃棄土坑で、埋土中から弥生時代後期中葉頃の土器が多量に出土している。土器群は土坑中に堆積した厚さ20cm程の暗茶褐色砂質土層上に水平に堆積しており、極めて良好な一括資料であると判断できるが、この地区特有の糸巻き形の器台や小型の支脚・壺形土器が多量に含まれる他、大型の器台片、焼成後に肩部２カ所に穿孔した壺形土器等の特殊な遺物が認められ、祭祀に用いられた遺物の廃棄土坑の可能性がある。また、土器群と伴に含まれていた河原石中に凹石が１点認められた。

SK-10はSD-02を切りST-09に切られる点と出土した遺物等から見て、弥生時代後期中葉の所産であると考えられる。

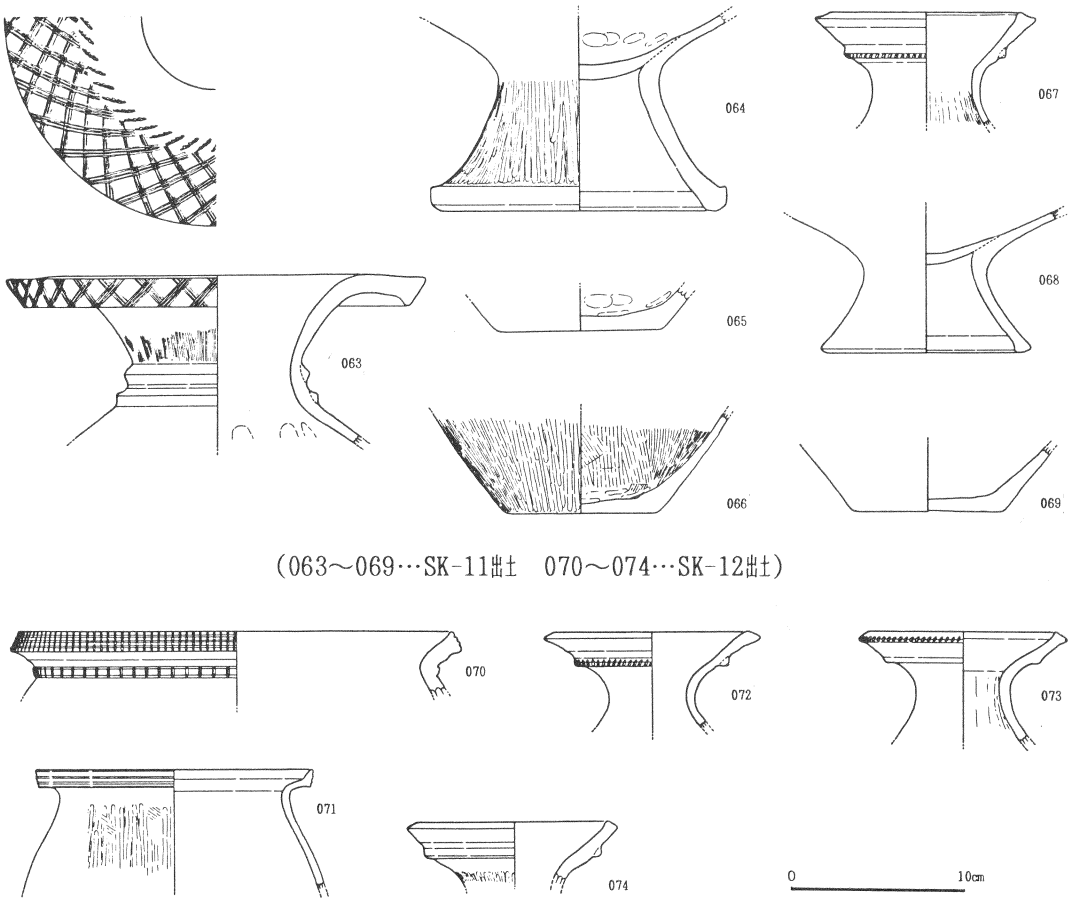


第30図　ＳＫ－１０実測図

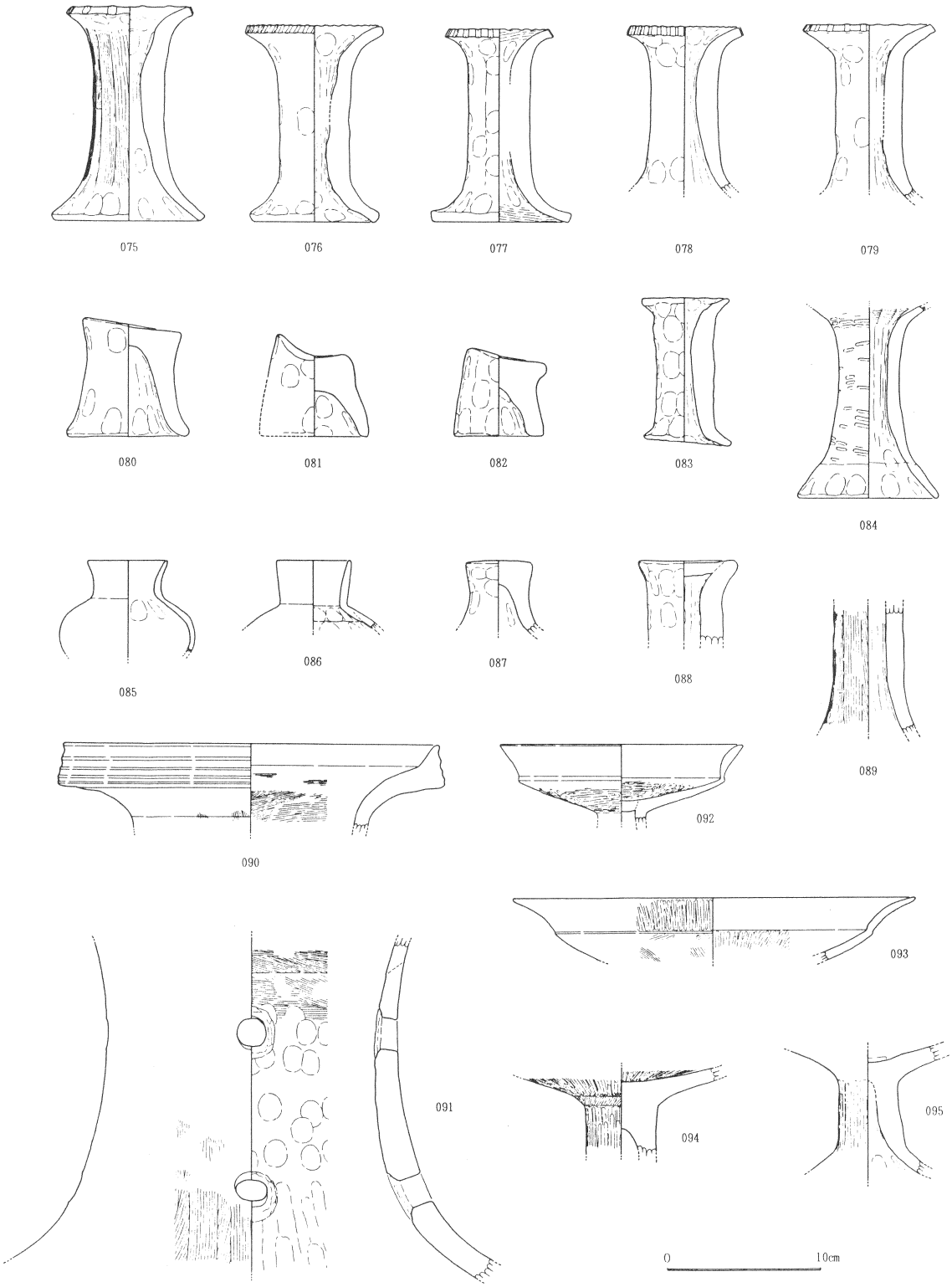
SK-11：第５調査区北西端でSD-04に西側を切られる形で検出された南北に１ｍ・東西に1.5ｍ以上の規模を持つ土坑で深さ約20cmを計る。土坑中には更に30×50cm、深さ25cm程の落ち込みがあり、中から弥生時代中期前葉の土器と河原石片が多量に出土しているが、河原石は赤黒く変色し弾けるように壊れており、土器も明褐色に変色・変質し、土坑内面も強い火に接したようで変色してしまっている。

SK-12：SK-11から西に1.5ｍの間隔を置いて検出された55×35cm、深さ25cm程の土坑で、SK-11と同一時期の土器片が多量に出土している。

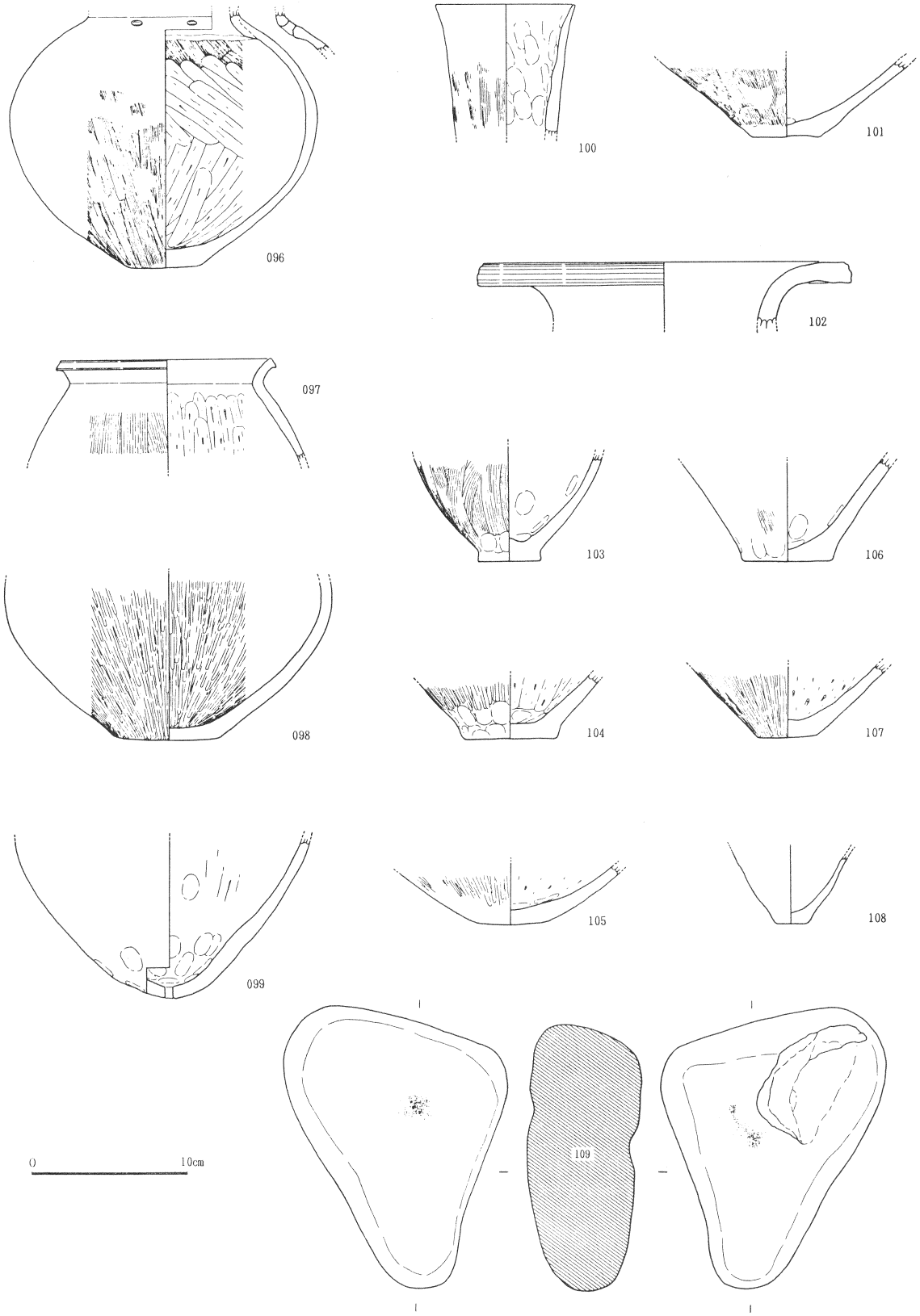
第５調査区では弥生時代中期前葉の土器のみを含む土坑、柱穴が多数検出されているが、住居は確認されていない。 遺構の特徴や周辺の削平状況から見て、SK-11などは竪穴住居の中央土坑のみが残されている可能性も考えられる。



第31図　ＳＫ－１１・ＳＫ－１２出土遺物実測図



第32図　ＳＫ－１０出土遺物実測図　(075～095)



第33図　ＳＫ－１０出土遺物実測図　(096～109)

⑥ 第６調査区：調査区北端の遺構面は、第５調査区と同様に通常の黄褐色砂質土層であるが、中央から南端にかけては暗褐色に汚れた砂質土層となり、南端の一部では完全な砂礫土層に変わる。また、調査区中央から南端にかけては遺構の大半が削平され、更に近世の遺構群によって攪乱を受けているため遺存状況は極めて悪い。

しかしながらこの調査区内では、弥生時代の竪穴住居跡6棟(ST-11～ST-16)をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての溝状遺構(SD-08～SD-10)や土坑(SK-27～SK-29)・柱穴群の他、多数の近世土坑(SK-30～SK-42)等が確認されている。

また、調査区南側では地山が砂礫土層となり遺構も消滅していると考えられたため、全面調査ではなくトレンチによる遺構の確認調査を実施したが、暗褐色砂質土層中で小児壺棺墓(SX-04)が確認されている。

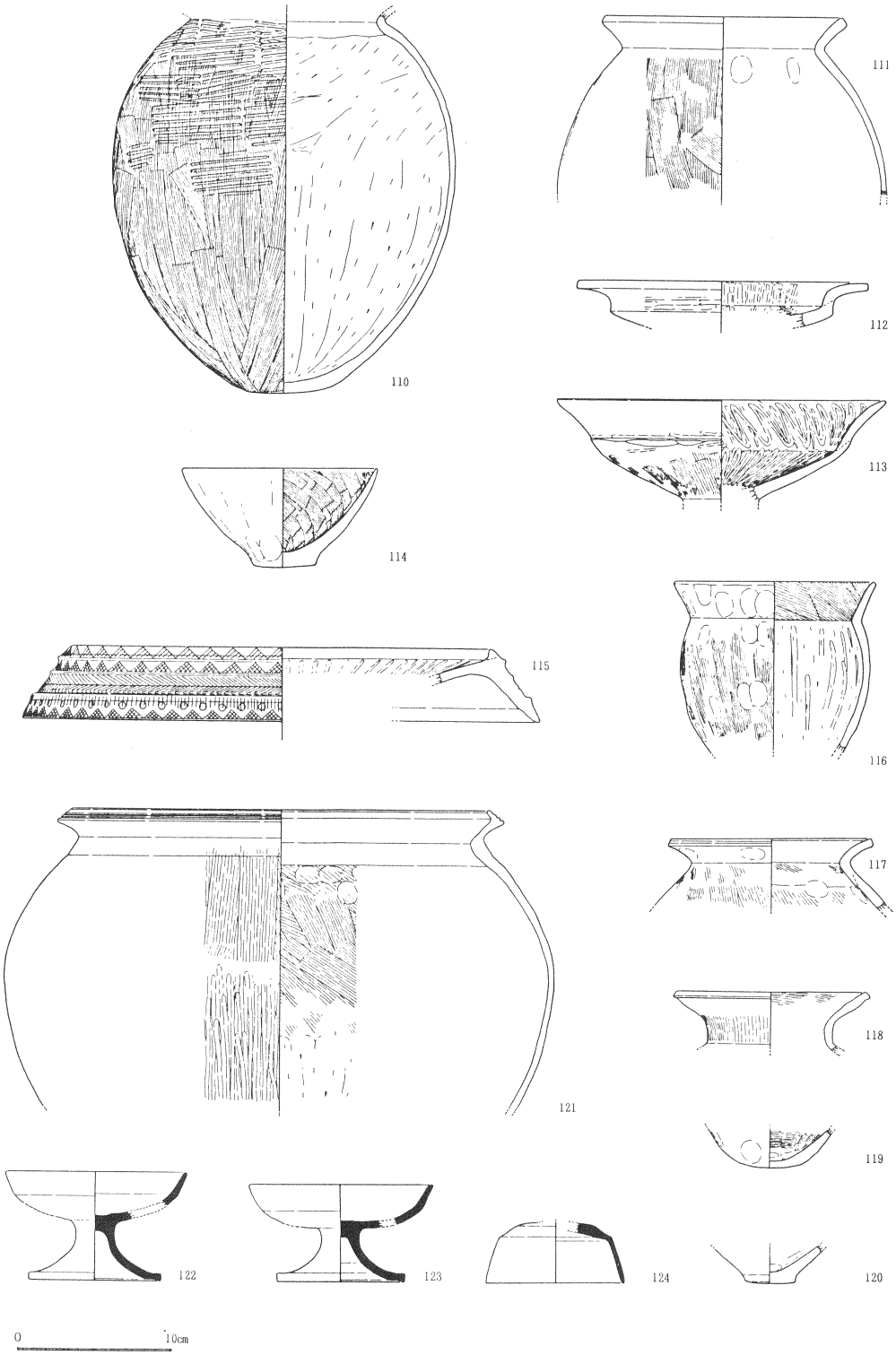
ST-11：調査区北西隅の西壁沿いで、しかもST-12に切られているためごく一部しか検出されていないが、その遺存状況からかろうじて竪穴住居跡と判別できた。埋土中からは弥生土器の細片がわずかに出土しただけで、北西端にベッド状遺構を持つことから南東方向に広がると推定できることと、ST-12以前の所産であること以外は不明である。

ST-12：調査区北西隅で検出された隅丸方形を呈する竪穴住居跡で、東壁から西壁に向って広くなる。規模は東西に5.3m･南北に4.8～5.5m･主軸方位はN-12°-Eで、住居の南東隅から南壁面に沿って幅約50cm･高さ約10cmのベッド状遺構を持つ。埋土中から遺物は殆ど出土していないが、Ⅱ濃黒色砂質土層(第35図参照)から弥生時代後期末頃の土器が多数、床面直上からは小型の鉢が１点完全な形で出土している。Ⅱ濃黒色砂質土層から出土した土器のうち高坏は伏せた状態での出土である。この地区では弥生時代後期末から終末期にかけての住居跡跡において、廃絶後床面上若しくは埋没途上の住居内に土器を伏せて並べた例がしばしば報告されている。

ST-13：調査区中央の西壁沿いで東半分が検出された、東西に約8mの不整円形若しくは多角形を呈する竪穴住居跡である。床面を含めた周辺部は暗褐色の砂礫層であり遺構の判別が困難で、壁に沿う溝や柱穴等完全な検出はできていない。

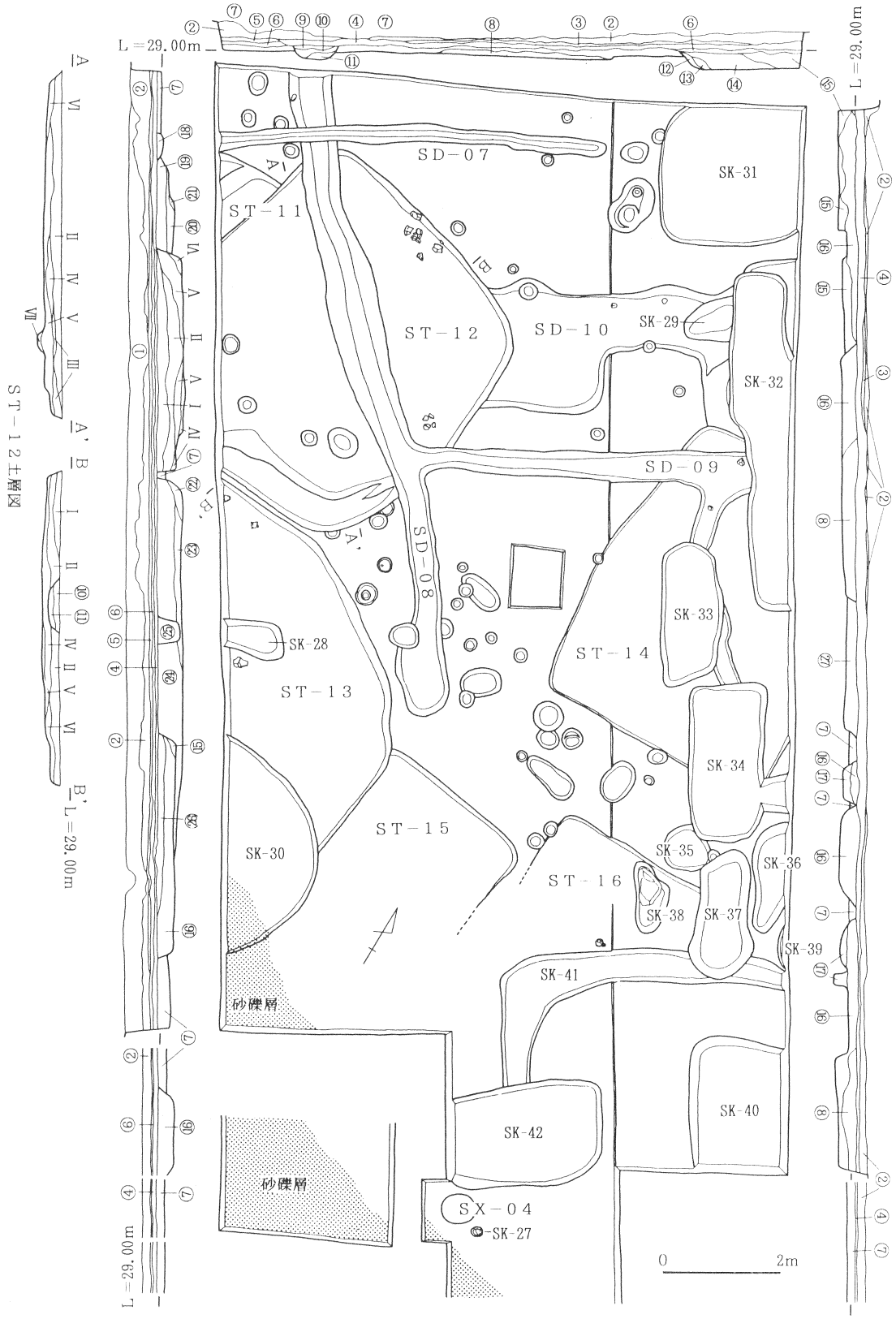
埋土中には土器片等は殆ど含まれていなかったが、㉔黒茶色砂質土層(第35図参照)下層からサヌカイト片多数と安山岩製の砥石片、そして弥生時代終末期頃の特徴を示す甕がほぼ完全な形で出土しており、ST-13はこの頃機能し廃絶したと考えられる。

ST-14：調査区中央の東壁沿いで検出された、南北に5.5m･東西に4.5mの長方形を呈する竪穴住居跡でほぼ磁北に主軸方位を持つ。ここは地山が比較的安定してはいたが床面は暗褐色に汚れた砂質土層であり柱穴等の検出はできていない。遺構はかなり削平されており検出面から床面までの深さは10cm程で、床面直上から弥生土器片が１点と石包丁片が１点出土しているだけで他に遺物は無い。従って、ST-14の機能し廃絶した時期を知ることは



第34図 第６調査区出土遺物実測図

(110・111…ST-13出土　112…ST-14出土　113・114・117～120…ST-12出土
115・116…ST-16出土　121…SK-27出土　122～124…SK-29出土)



第35図 第６調査区平面・土層実測図

難しいが、弥生時代後期後葉から後期末頃までの所産ではないかと思われる。

ST-15：調査区南端で検出されたほぼ方形を呈する竪穴住居跡であるが、地山が暗褐色に汚れた砂礫層であり柱穴等は検出できず、また遺構の南半は削平され消滅してしまっており、N-8°-Eに主軸方位を持ち東西に約3m程の規模である程度しかわからない。出土遺物等は皆無であるが、周辺の遺構との複合状況からST-14同様、弥生時代後期後葉から後期末頃までの所産ではないかと思われる。

ST-16：ST-15と並んで調査区南端で検出されたほぼ方形を呈する竪穴住居跡で、遺存状況もST-15のそれと酷似しており、地山も暗褐色に汚れた砂礫層であり柱穴等は検出できていない。また遺構の南半は削平され消滅してしまっており、ほぼ磁北に主軸方位を持ち東西に3～3.5m程の規模である程度しか把握できていない。

床面東隅直上から小型の甕と大型の器台か壺の口縁の一部と考えられる鋸歯文等の装飾が一面に施された土器片が出土しており、ST-14・ST-15同様弥生時代後期後葉から後期末頃までの所産ではないかと思われる。

① 黒色砂質粘土層(耕作土)
② 暗灰色砂質粘土層(耕作土)
③ 淡灰色粘性土層
④ 明灰褐色砂質土層
⑤ 青灰色粘性土層
⑥ 灰褐色砂層
⑦ 地山(マンガン結核による変色部分)
⑧ 灰色砂礫層
⑨ 灰褐色砂質土層
⑩ 淡灰褐色砂質土層
⑪ 暗灰色砂質土層
⑫ 灰褐色砂質土層
⑬ 淡灰色砂質土層
⑭ 暗茶色砂質土層
⑮ 暗黒色粘性土層
⑯ 砂礫層(こぶし大の礫を含む)
⑰ 濃灰色砂層
⑱ 黒褐色砂質土層
⑲ 灰色砂質土層
⑳ 暗灰褐色砂層
㉑ 明褐色砂層
㉒ 暗黒色砂質土層
㉓ 暗褐色砂質土層
㉔ 黒茶色砂質土層
㉕ 暗黒色粘性粘土層
㉖ 濃灰色砂質土層
㉗ 淡灰褐色砂質土層

Ⅰ 濃黒褐色砂質土層
Ⅱ 濃黒色砂質土層
Ⅲ 暗灰色粘性土倉
Ⅳ 暗黒色粘性土層
Ⅴ 暗黒色砂礫層
Ⅵ 暗灰色砂層
Ⅶ 暗灰色砂礫層

SD-07：現在残る水田の方画地割と同一方位に流れる小さな溝で、出土遺物等は皆無であるが、埋土は比較的新しく中世以降の遺構と考えられる。

SD-08：遺存状況から見てSD-06の延長ではなく新たな遺構と考えられる。また、SD-08は北に向って延びるが第5調査区では検出できておらず、途中で向きを変えるか消滅するものと考えられる。

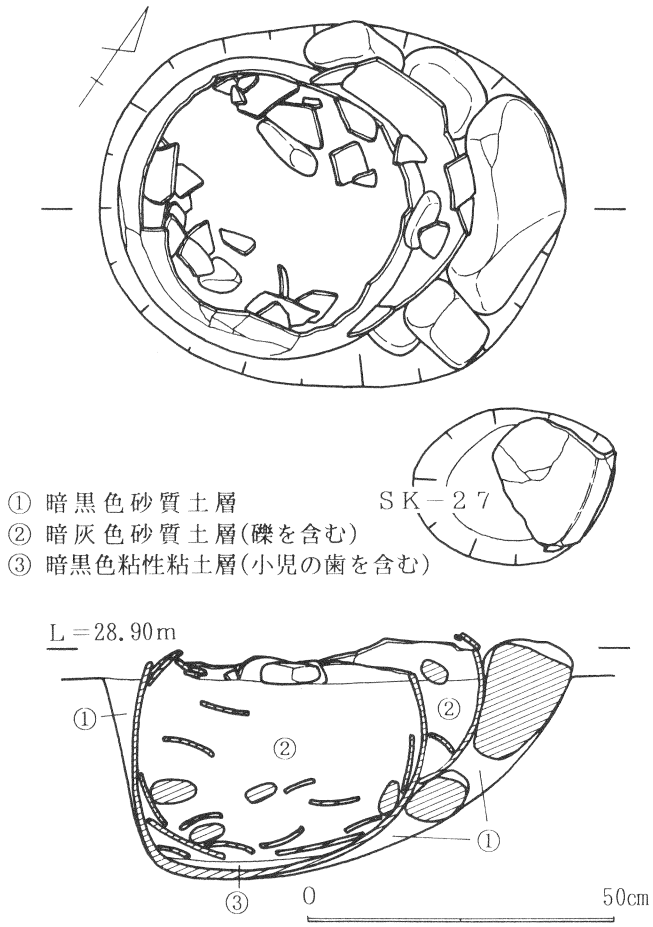
SD-08の南側は調査区中央で消滅する。

SD-09：SD-08の途中から東に延びる溝で調査区東端で更に南に分岐する。SD-08とSD-09からは弥生土器小片多数と須恵器小片が数点出土しており、遺物を詳細に調べた結果、古墳時代後期頃の所産と推定される。

SD-10：土地の削平に伴い深さ3cm程しか残されておらず、出土遺物等は弥生時代後期中葉頃の土器片とサヌカイト片が数点出土しただけで、この遺構の性格等を知ることはできない。しかし、出土遺物や遺構の複合状況等から、弥生時代後期中葉から終末期までの間の所産と考えられる。

SK-27：SX-04脇で検出された小土坑で、弥生時代中期後半頃の大型の鉢の一部が出土している。

SK-28：埋土中から弥生土器と須恵器の小片がわずかに出土している。古墳時代の遺構と考えられる。



第36図　ＳＸ－０４実測図

SK-29：SD-10廃絶後に構築された土坑で古墳時代後期末頃の須恵器の高坏が２点と坏蓋片が１点出土している。この他の遺物は全く含まれておらず、遺物からも何等かの祭祀に伴う遺構ではないかと考えられる。

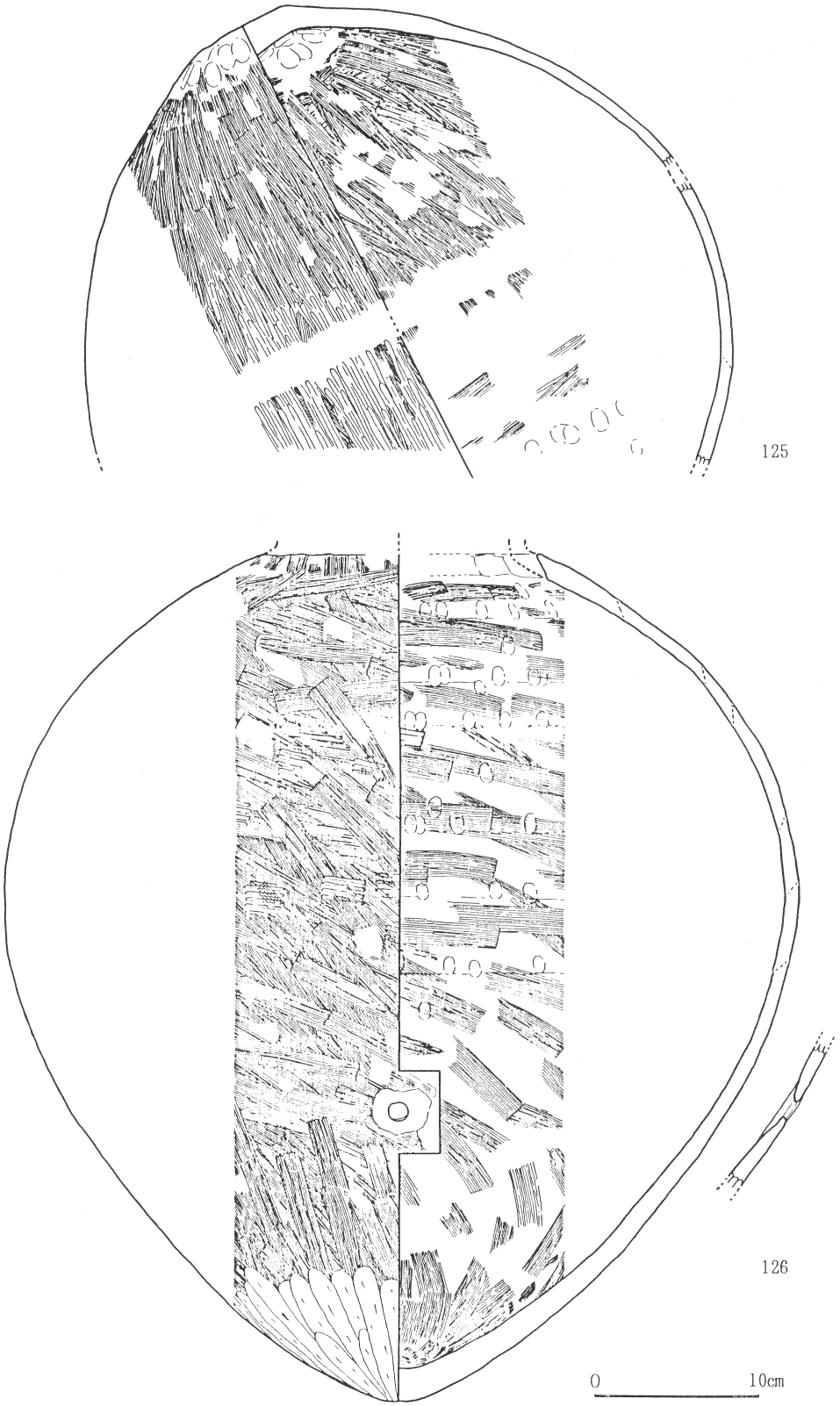
SX-04：第６調査区南部では、地山が砂礫土層となり遺構も消滅していると考えられたため、全面調査ではなくトレンチによる遺構の確認調査を実施したところ、検出された小児壺棺墓である。

壺棺の主軸は40°、N-55°-E方位に傾いており、埋葬状態での北寄りの横で、やや底部寄りのに直径１cm程の円形を呈する孔が認められた。これはその状況から、墓壙内に棺を納める前に外部から穿孔したものであることがわかる。

遺構は削平されており、検出状況では壺棺上部がかなり失われているように見えるが、蓋に転用されていた土器と伴に内側に陥没しており、棺に転用されていた壺形土器は頸部以上を除いてほぼ完全に復元できた。蓋に転用された土器は棺に装着された状態で残存した部分と棺内部に陥没していた土器片から見て、第37図の125の様な大型の壺形土器の体部を斜めに半切したものが用いられていたようである。また蓋を固定するために、墓壙内に20～40cm程の河原石を詰めて固定してあった。

SX-04は埋土から見てSX-02のように段階的に破壊されたのではなく、最下層の暗黒色粘性粘土層が堆積した後、遺構上部の削平によって一気に破壊されたものと考えられる。この最下層の粘土中から小児のものと見られる歯片と骨片が出土している。(44頁参照)

その他の遺構造：第６調査区の東壁沿いでは大通線の原道と平行する形で、狭長な形態の近世土坑(SK-30～SK-42)が多数遺存している。この土坑群の埋土はいずれもこぶし大の河原石を多量に含む砂礫層で、染め付け陶器(腕・皿)や古備前(摺り鉢)等が多量に出土している。廃棄土坑と思われる。(第80図参照)



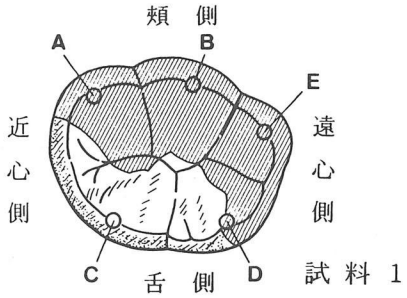
第37図 SX-04出土壺棺実測図

2．SX-04から出土した小児の歯の鑑定結果

岡山大学歯学部好調学教室教授
小田嶋 梧郎

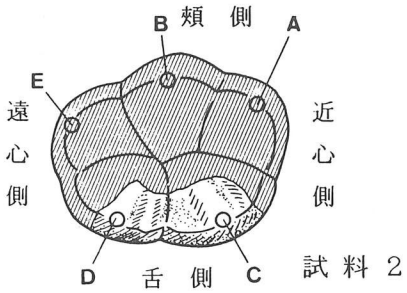
およそ50片の歯のエナメル質から確実に鑑別できた乳歯は、左右の下顎第二乳臼歯のみで、他の歯片は現時点では鑑別できない。しかしながら、およそ50片の歯のエナメル質から一個体歯のうち２本が鑑別できたことは喜ばしいことである。左右の下顎第二乳臼歯、つまり下顎歯の一番奥の５番目の歯が出土したので、恐らく数片の骨のうち比較的平板な骨は下顎骨体部ではないかと思われる。また、頭蓋底の骨片と思われるものもあるが定かではない。

上記２本の乳歯を観察すると、その咬合面の咬頭頂の形から、まだ顎骨内に存在(埋伏されたまま)していて萌出前と思われる。 よって、生後間もなくの一個体の乳児遺体の埋葬であると判断できる。



右・下顎第二乳臼歯 の咬合面観

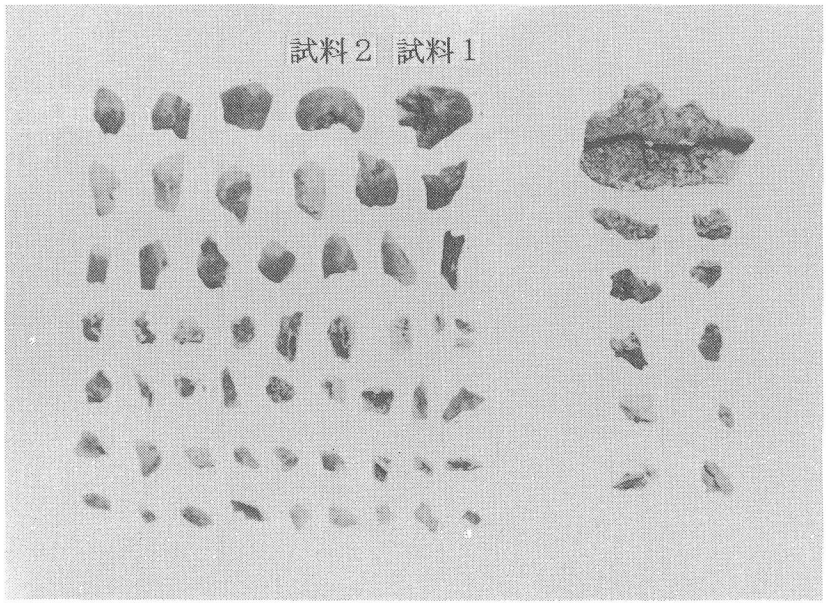
※ 斜線部分は欠損場所を示す。



左・下顎第二乳臼歯 の咬合面観

A～E(各咬頭頂の位置)	C：近心舌側咬頭
A：近心頬側咬頭	D：遠心舌側咬頭
B：遠心頬側咬頭	E：遠心咬頭

第38図 SX-04出土小児の歯実測図(×３)



第39図 SX-04出土小児の歯片(左)と骨片(右)・原寸

３．壺棺出土の小児の歯についての一考察　これまでにこの地区における発掘調査で弥生時代の小児の歯が確認された例は、彼ノ宗遺跡で小児壺棺墓15例のうち４例と土壙墓から１例の計５例であり、九頭神遺跡のものが６例目の資料となるが、この地区で確認される壺棺は成人を納めるには小さく、改葬骨が納められたものでもないようである。実際に小児の歯の発見例が増えていることを併せて、この壺棺葬が小児に限られたもので、成人は箱式石棺等の手段を以て集団墓に葬られると考えると、壺棺から出土する小児の歯から埋葬された人物の年令の上限が限られてくれば、その年令こそが弥生時代の小児と大人を区別する成長の段階の区切りを示しているのではないかと考えられる。しかし、残念ながらこれを判断するには未だ資料が乏しく、今後の調査による発見例の増加を待たなくてはならない。彼ノ宗遺跡の５例の鑑別結果は以下のとおりであった。いずれも小田嶋先生に鑑別して頂いた。

①SX-01(壺棺墓)生後１～２年　②SX-03(壺棺墓)７才前後
③SX-05(壺棺墓)歯は細片が1点だけで鑑別は不可能であるが土器棺の口から見て乳児遺体埋葬と推定される。
④SX-09(壺棺墓)７才前後　⑤SX-16(土坑墓)生後間もない乳児

その他の遺物　これまでに紹介した遺物は遺構の説明に必要なものだけで、表土層や溝状遺構(SD-02･SD-04･SD-05･SD-06)の埋土中に混入していた多量の土器等については触れていないが、これについては改めて整理し別に報告する機会を得たい。

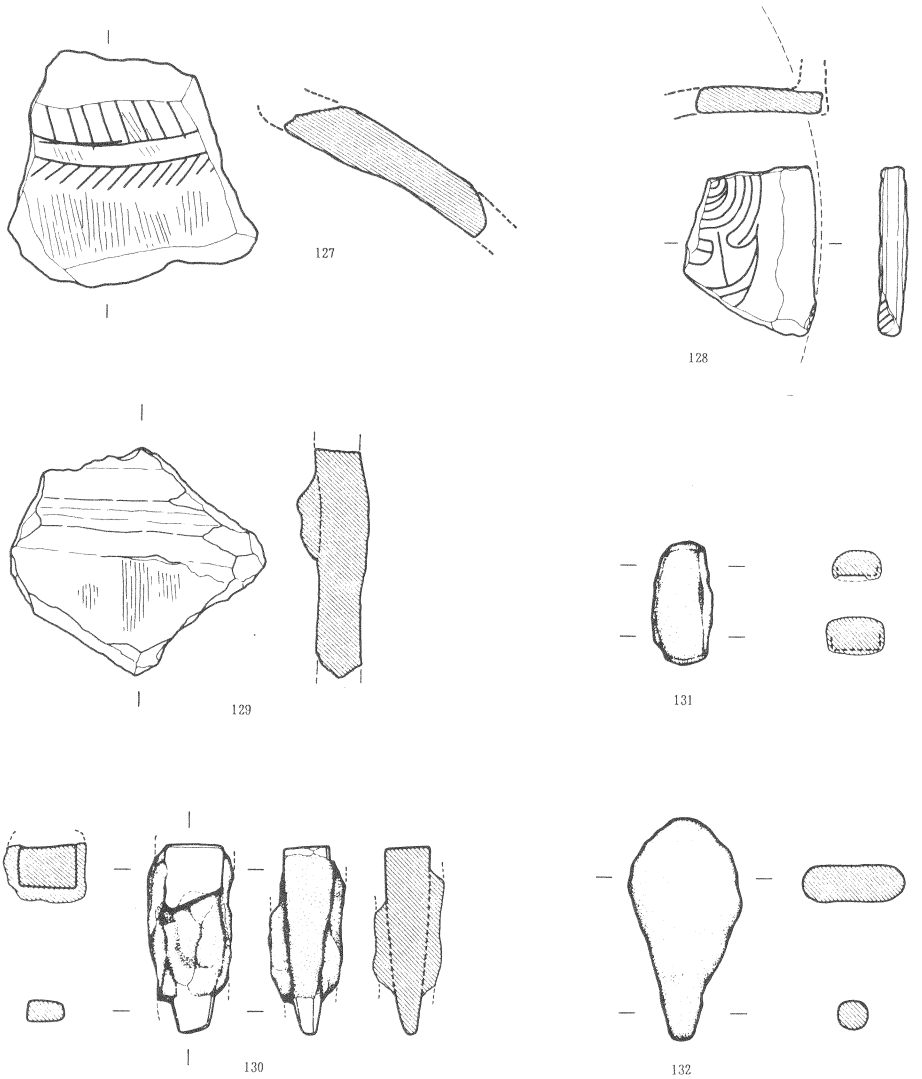
ここでは、その中から代表的な遺物を数点紹介したい。

SD-05埋土中と第３区の攪乱層からそれぞれ1点づつ線刻模様の施された土器片が出土している。 前者(第40図の127)は壺形土器の肩部に施された連続文であり、単なる頸部周辺の装飾の可能性もあるが、後者(第40図の128)は壺形土器の二重口縁内面に施された直弧文状の文様で、二重口縁部分外面には鋸歯文で装飾されているようである。弥生時代後期末頃のこうした呪文の例は、県内では善通寺市の仙遊遺跡で出土した箱式石棺石材に人面文や水鳥の絵と伴に線刻された弧帯文や直弧文状の図文が知られているが、土器では高松市の鶴尾神社４号墳(積み石の前方後円墳)の墳丘や竪穴式石室内から出土した土器片の例が知られていただけである。

第40図の129は第６調査区攪乱層から出土した円筒埴輪の実測図である。この埴輪片は暗灰色の須恵質で古墳時代後期初頭頃のものと推定されるが、この周辺の水田中に多数存在していたという円墳群の存在を改めて考えさせる資料である。

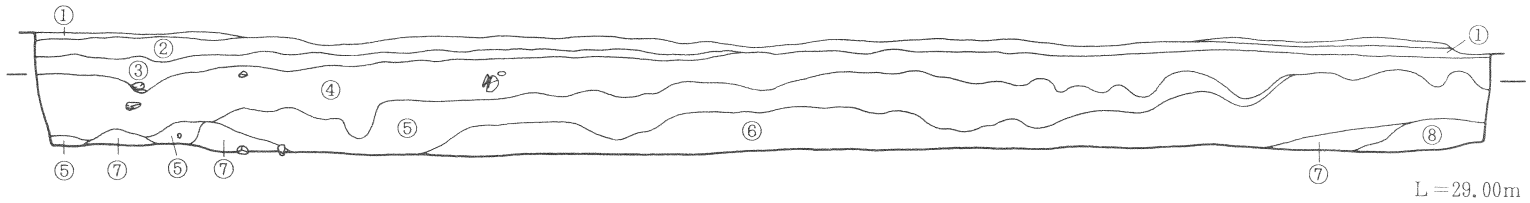
第40図の130～132は本文中で紹介した鉄器の実測図である。善通寺市内におけるこれまでの発掘調査によって、弥生時代後期頃の竪穴住居跡からの鉄器の出土例が多数知られて

いる。ただ、中期の竪穴住居内からサヌカイト製石器やその未製品、サヌカイト片が多量に出土するのに比べて後期前半はその量が減り、後期後半になると殆ど見られなくなる。逆に後期中葉以降の住居跡からの鉄器片や砥石が出土例が多いことから、この地区での鉄器の普及は弥生時代後期中葉頃からと考えられる。また、発見された砥石のうち良く使い込まれたものは乳灰色を呈する硬質の凝灰岩で、第16図の012のように分割を試みた痕が認められるものも複数あり、この地区では良質な砥石は鉄器と伴に貴重品であったことが伺われる。

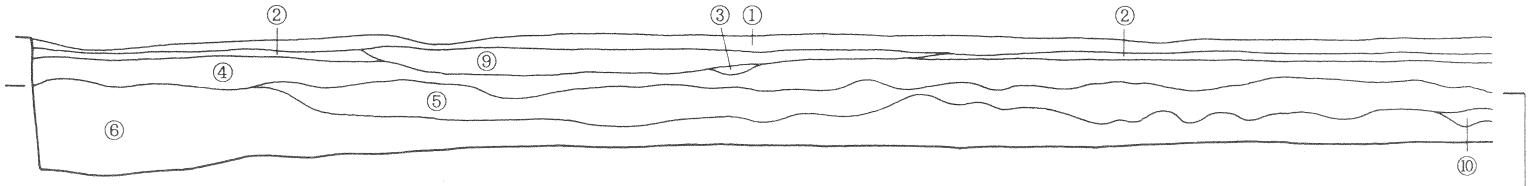


(127…SD-05埋土中から出土　128…第3調査区カクラン層出土
129…第6調査区カクラン層出土　130…SK-08埋土中から出土
131…ST-02埋土中から出土　132…ST-03埋土中から出土)

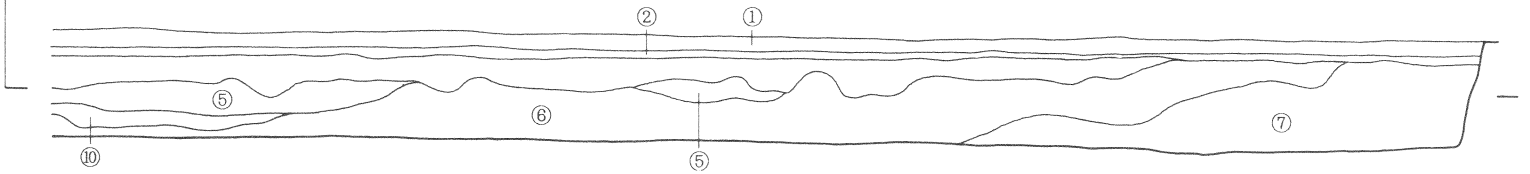
第40図 鉄器・線刻土器・円筒埴輪片実測図



トレンチ(TR-09)東壁面土層図



トレンチ(TR-10)東壁面土層図　L＝29.00m



0　2 m

① 暗灰色砂質粘土層(耕作土)
② 明 褐 色 砂 質 土 層
③ 灰 褐 色 砂 質 土 層
④ 暗 灰 色 砂 質 土 層
⑤ 地山(黄褐色砂質土層)
⑥ 地山下層(黄褐色砂層)
⑦ 灰　色　砂　礫　層
⑧ 青 灰 色 砂 礫 層
⑨ 明灰褐色砂質土層
⑩ 淡 褐 色 砂 質 土 層

第41図 第９・１０トレンチ土層実測図

第四章　まとめ

事前のトレンチ調査の結果を見るとTR-05では遺物･遺構は検出されていないが比較的安定した黄褐色砂質土層が確認でき、完全に砂礫層となるのはTR-06以南であることが判明していたため、TR-05とTR-06の間に再度トレンチ(TR-09・TR-10)を設定したところ、地山は比較的安定はしてはいたが遺構・遺構は確認できず(第41図参照)調査をここで終了することとした。

今回の調査で市内に所在する代表的な3つの集落遺構(彼ノ宗遺跡･稲木石川遺跡･九頭神遺跡)が部分的に調査されたことになるが、その他の事例と併せると、この地区の弥生集落は自然堤防を中心に派生した砂州上の南端部、つまり最初に安定した微高地に弥生時代中期に定住し、土壌が北の低地に向って安定して行くのに併せて弥生時代後期の集落が広がるという共通した傾向が認められる。稲木石川遺跡では、まだ北端部しか調査されていないが、南部では中期から後期にかけての遺物が表採できる。従って善通寺市周辺部では河道と河道の間に形成された微高地上に営まれた集落を調査すると、集落の南部では弥生時代中期から終末期にかけての遺構が検出され、北に移るにつれて次第に後期末から終末期の遺跡構造ばかりが検出されることになる。これは扇状地である丸亀平野全域について共通している事象と推定される。ただ、集落が弥生時代前期から中期以降に継続する例は少なくその分布は異なっており、また中期以降の集落は庄内併行時期で消滅し布留併行時期まで続かず、この両時期の社会変化を伺わせる。

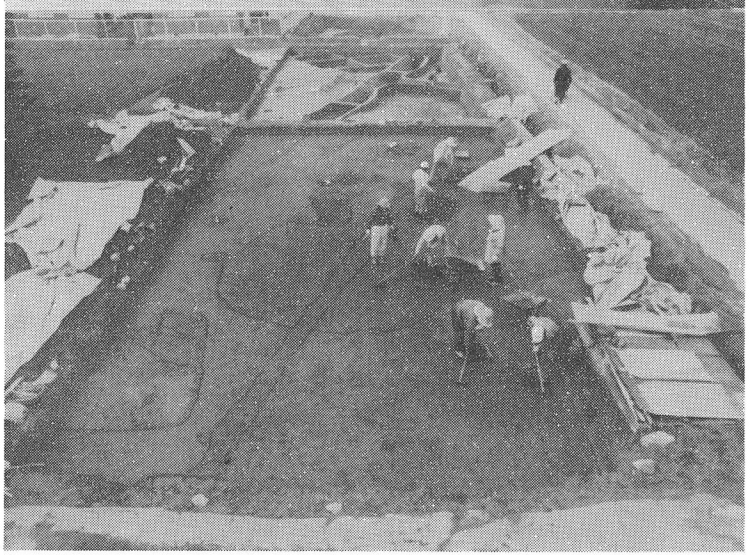
これまでは、表面採取や土木工事の際に偶然発見された遺物によって推定されていた古代集落の存在が、ここ数年の内に盛んになった開発行為に伴う調査によって次第に明らかにされつつあり、また重要な発見も数多くなされている。こうした調査によって得られた膨大な資料は未だ完全に整理されておらず、今後まだ増加する傾向にある緊急発掘調査と併せて、埋蔵文化財調査に携わる我々の責務を実感する次第である。

最後に、善通寺市周辺で出土する弥生時代後期の土器の胎土で一番大きな比重を占めるのは石英・長石・雲母を含む花コウ岩の風化土を粘土と混合したものであるが、他に比較的多く、また目立つ存在として表面に多量の金色の雲母と、胎土中に微細で粒の揃った角閃石・斜長石・正長石・石英を含むものが知られている。前者の胎土中の鉱物はその内容から花コウ岩の風化土であると見られ、後者についても胎土中の鉱物から特定の火成岩の風化土を用いたものではないかと考えられていたが、これが角閃花コウ岩の風化土であることがほぼ判明したのでここに付記しておく。角閃花コウ岩は花コウ岩とほぼ同じ分布を示し、善通寺市内では市南東部の陣山西部で露頭が観察できる。(69～71頁・遺物観察表参照)

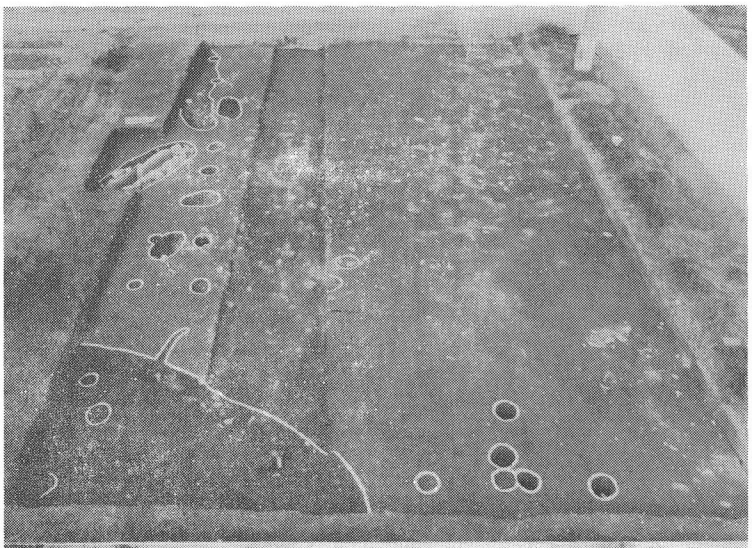
図　　版

第42図
調 査 前 全 景
(北から望む)

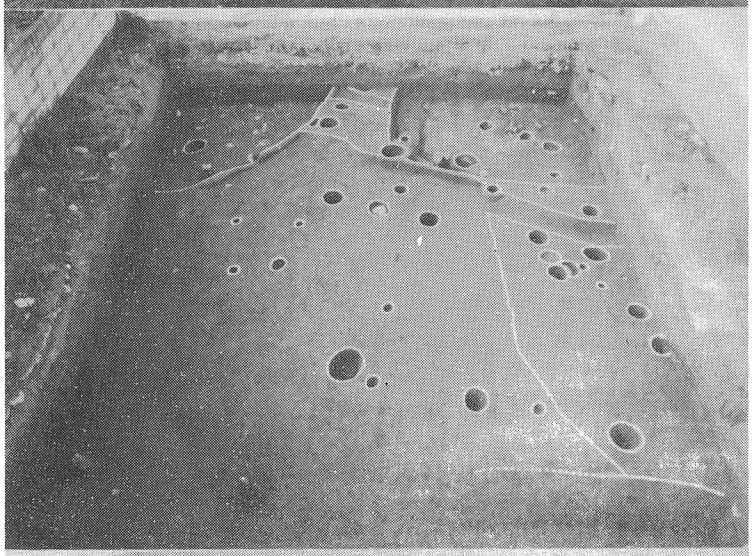
第43図
表 土 除 去 作 業 風 景
(第６区から蘢を望む)



第44図
発 掘 調 査 風 景
(第６区から北を望む)

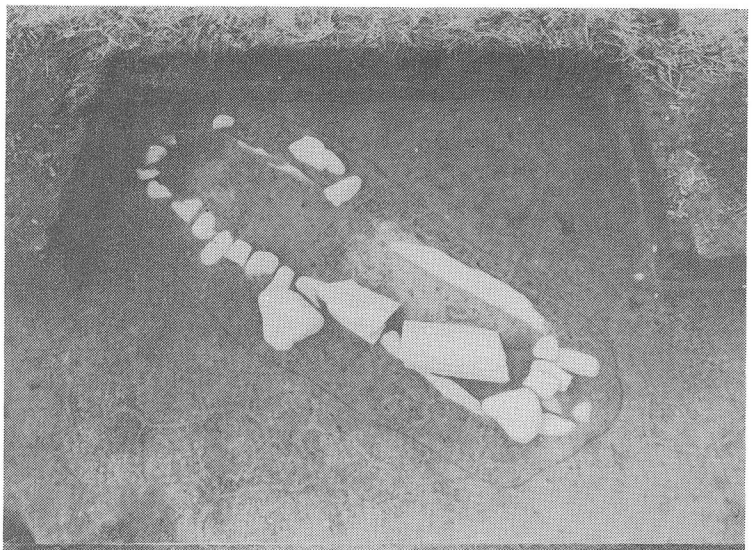


第45図
第 1 調 査 区 全 景
(北から望む)

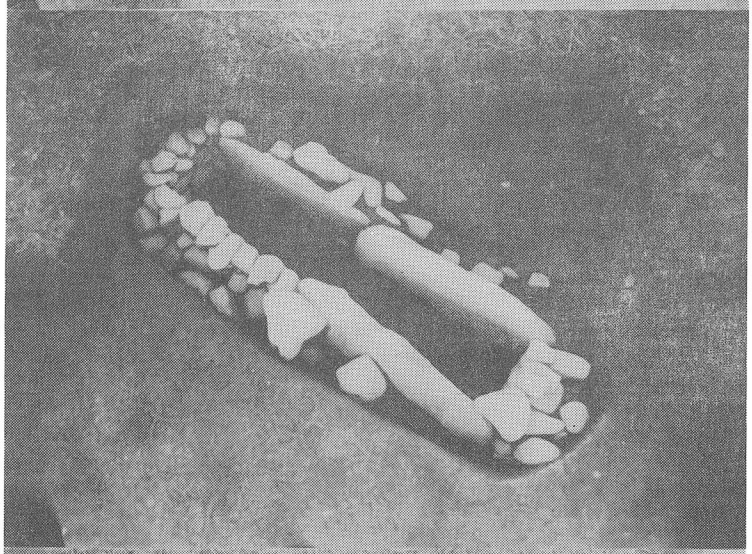


第46図
第 2 調 査 区 全 景
(北から望む)

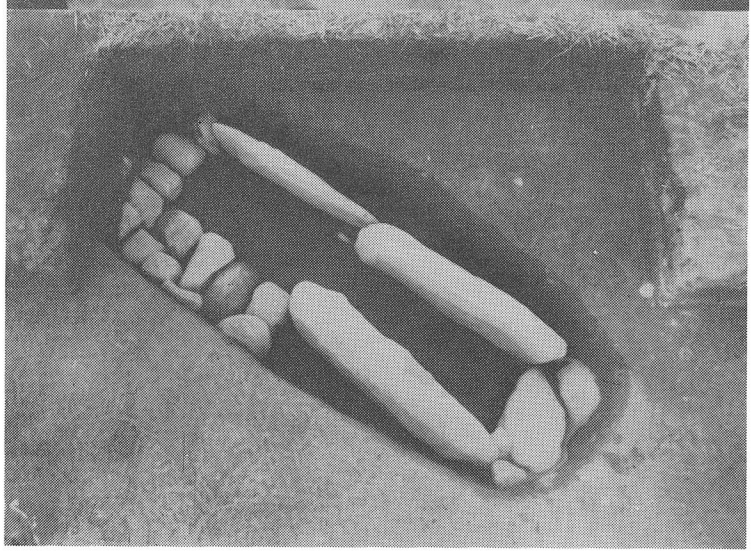
第47図
第 3 調 査 区 全 景
(北から望む)



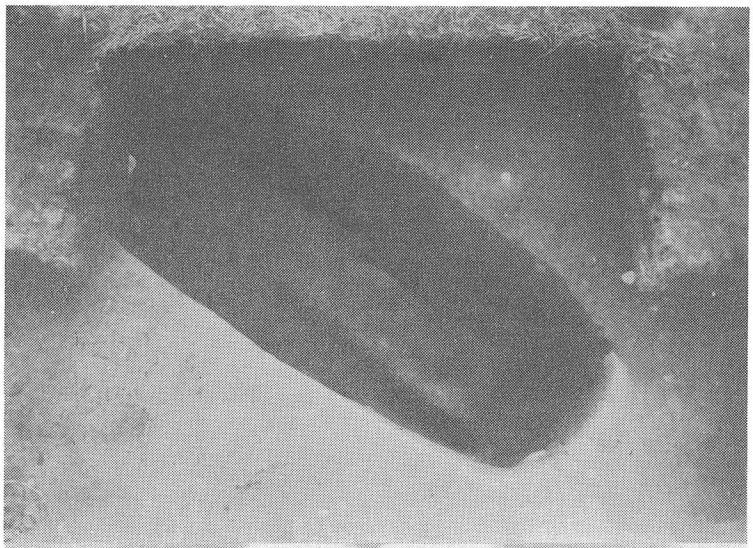
第48図
ＳＸ－０１検出状況
（北東から望む）



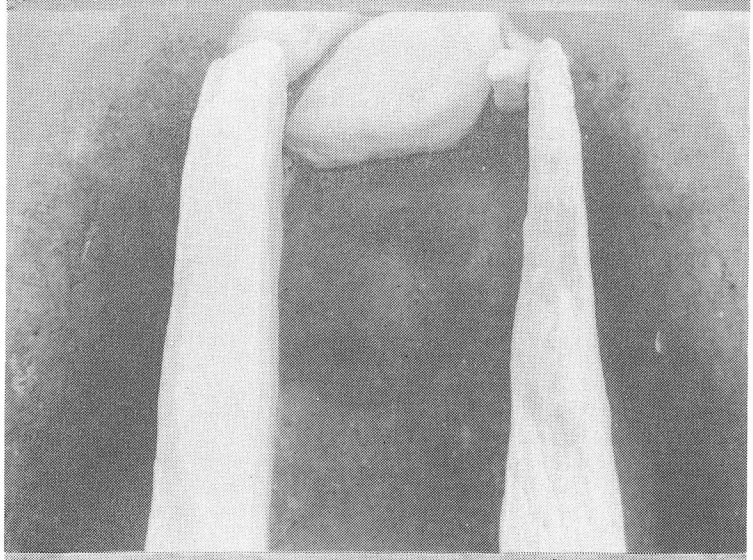
第49図
ＳＸ－０１完掘状況
（北東から望む）



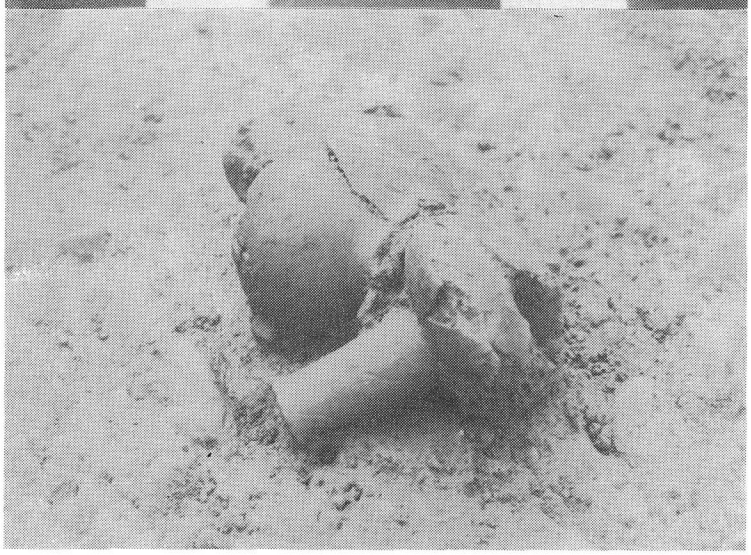
第50図
SX-01基底部検出状況
（北東から望む）



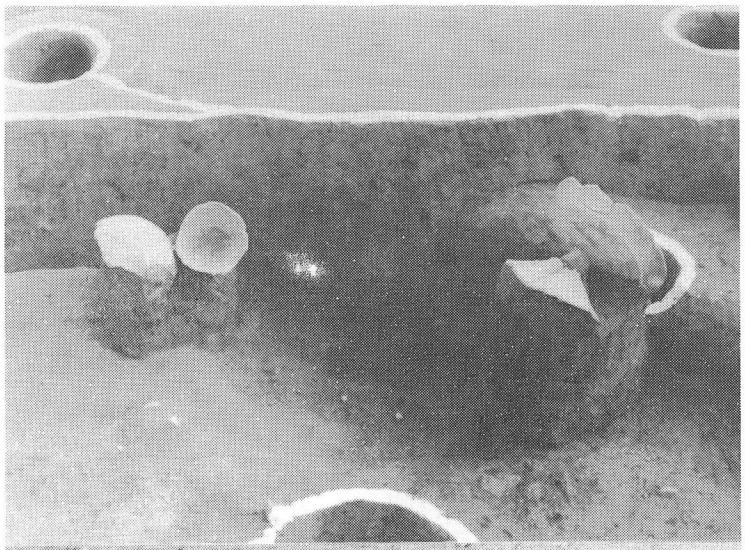
第51図
SX-01石材除去後の状況
(北東から望む)



第52図
SX-01枕状遺構検出状況
(南から望む)



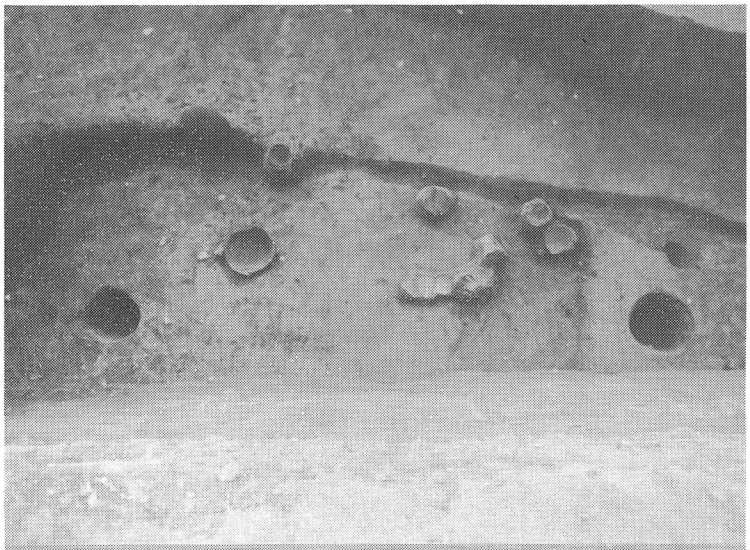
第53図
ST-01遺物出土状況
(東から望む)
遺物番号…001・002



第54図
ST-02遺物出土状況
(北から望む)
遺物番号…007～009

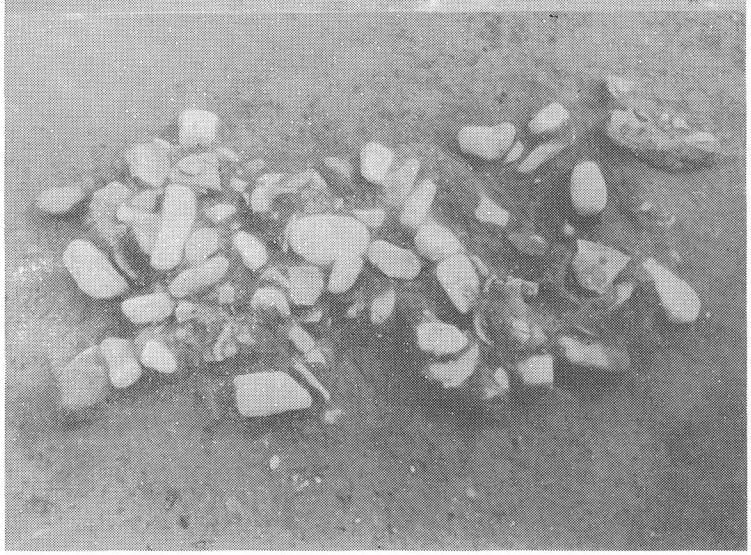
第55図
ST-03銅鏃出土状況
(土層観察用畦からの出土状況)

第56図
ST-03遺物出土状況
(北から望む)
遺物番号…010～012

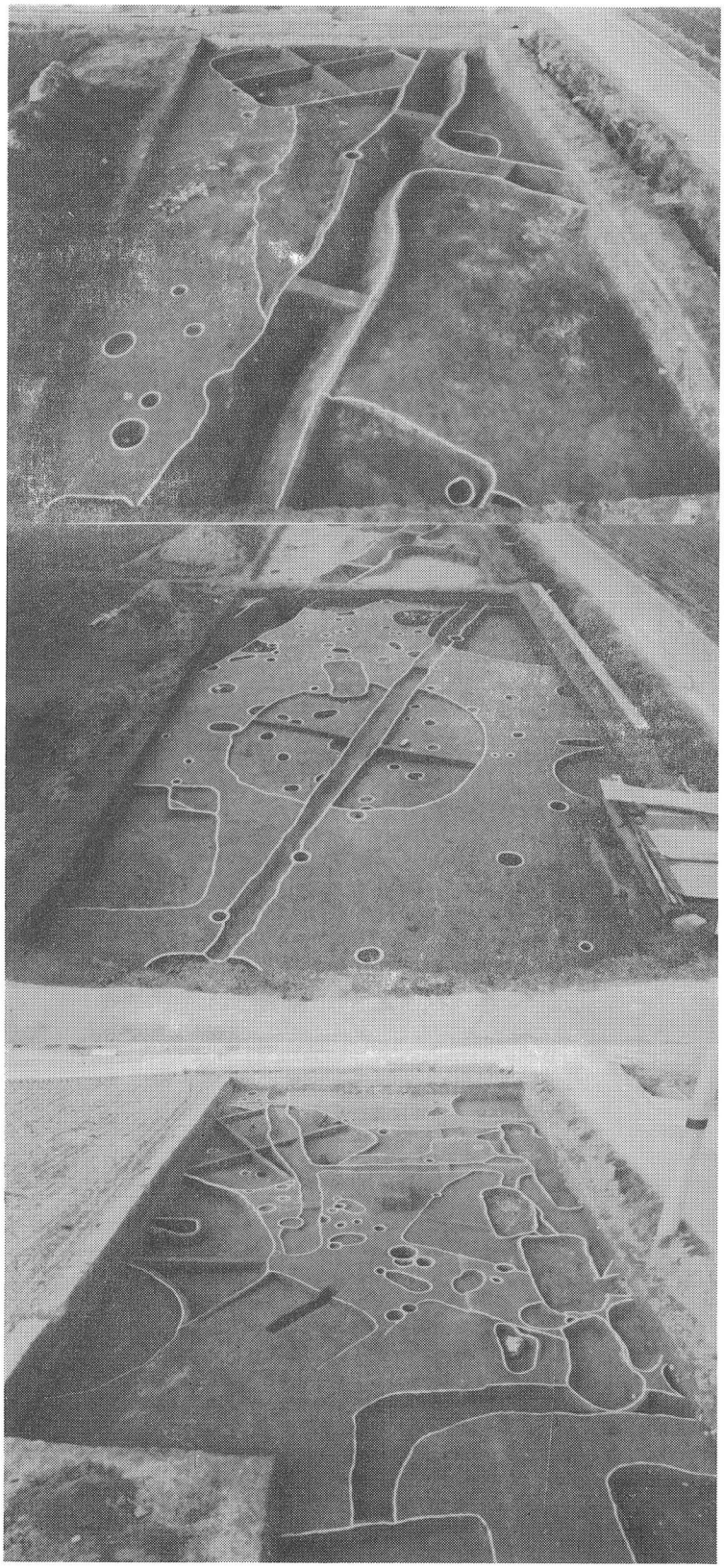


第57図
ST-05遺物出土状況
(東上方から望む)
遺物番号…013～023

第58図
ＳＸ－０２検出状況
(北西から望む)
遺物番号…024・025



第59図
ＳＸ－０３検出状況
(西から望む)
遺物番号…042～053

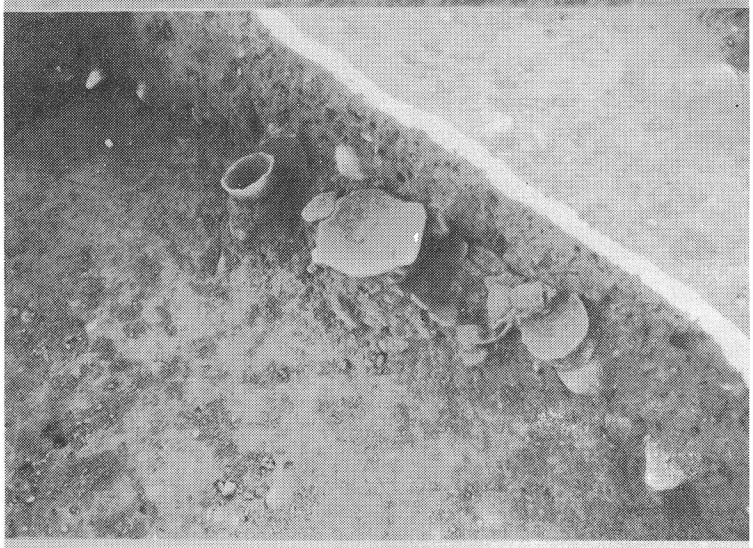


第60図
第 4 調 査 区 全 景
(北から望む)

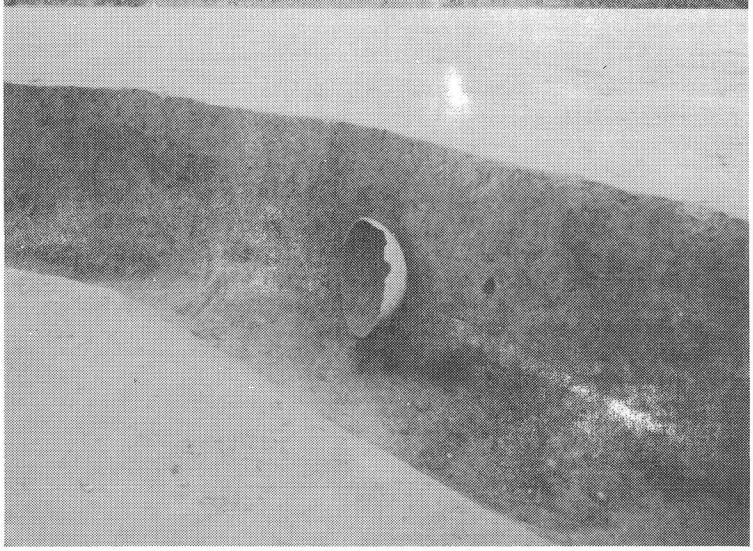
第61図
第 5 調 査 区 全 景
(北から望む)

第62図
第 6 調 査 区 全 景
(北から望む)

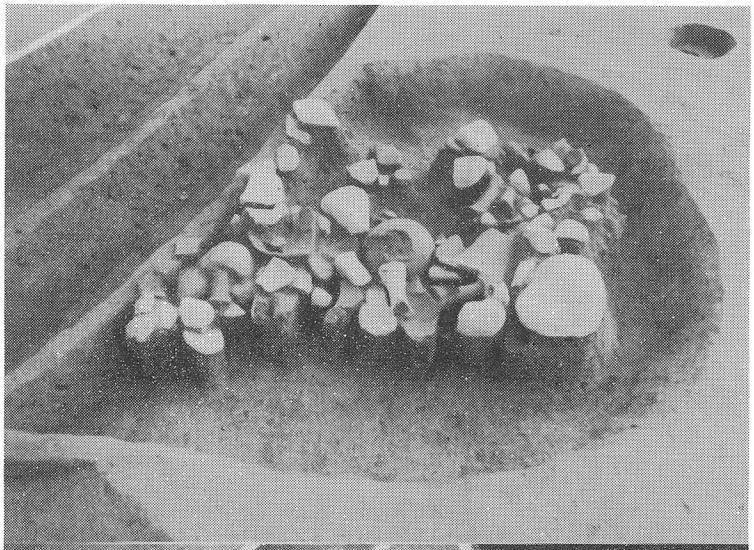
第63図
ST-06遺物出土状況
(北から望む)
遺物番号…042～053



第64図
ST-06遺物出土状況
(北東から望む)
遺物番号…030・032～034
・040・041

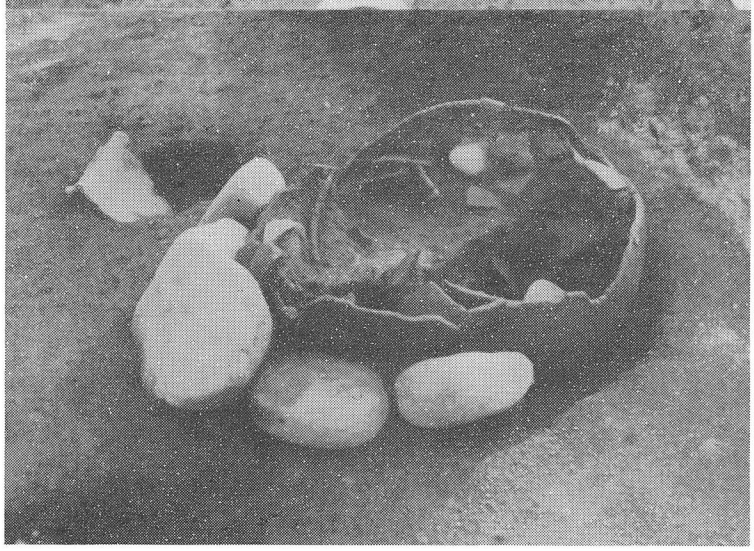


第65図
ST-09遺物出土状況
(北西から望む)
遺物番号…060



第66図
ＳＫ－１０検出状況
（北から望む）
遺物番号…075～109

第67図
ＳＫ－１１検出状況
（北から望む）
遺物番号…063～069



第68図
ＳＸ－０４検出状況
（北から望む）